廣島高等師範學校
附屬中學校
國語漢文研究會編

中等新國文

卷八

375.9
Hi18
資料室

教科
41
2000

42239

教科書文庫
4
810
41 1927
20000
26436

資料
教科書文庫
4
810
41-1927
2000026436
375.9
Hi18

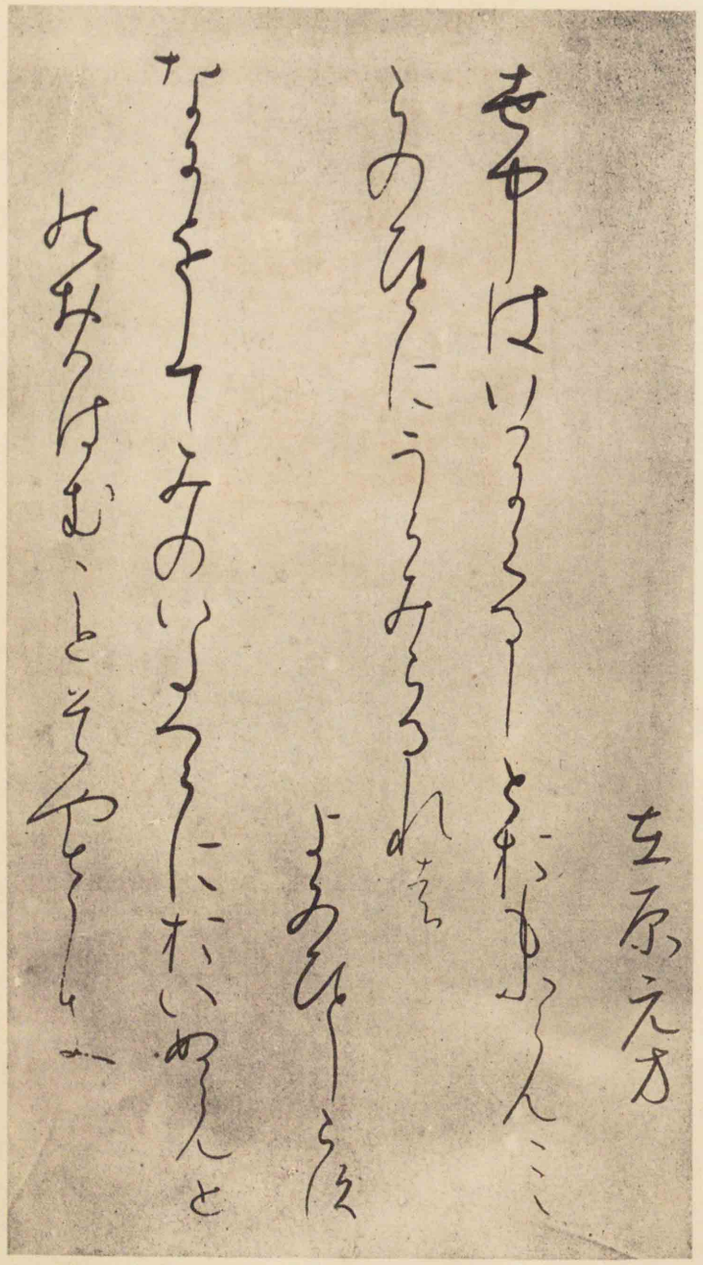
昭和二年一月十二日
中學校國語科
文部省檢定濟

中等新國文

廣島高等師範學校附屬中學校
國語漢文研究會
編

広島大学図書
2000026436

東京
合資會社
六盟館



紀貫之筆蹟（古今集の一部）

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 26436 圖書

世中はいかにくるしとおもふらんこゝらのひとにうらみらるれは

在原元方

なにをしてみのいたつらにおいぬらんこしのおもはむことそやさしき

よみひとしらす

中等新國文 卷八

目次

一 乃木大將の殉死……德富蘇峰 一
二 人臣の道……神皇正統記 八
三 新葉和歌集……大町桂月 一四
四 光あれ……姉崎正治 一九
五 道友に答ふ（書簡文）……綱島梁川 二五
六 東路の旅……東關紀行 二九
七 春日野（和歌）……三五

書取

八　秋の本質……豐島與志雄　三八
○九　重盛の教訓……平家物語　四五
○一〇　平家雜感……高山樗牛　五七
都落……五七
清盛入道……六〇
○一一　俊寛（謠曲）……六六
○一二　鎌倉室町時代の文學……藤岡作太郎　七三
○一三　嗚呼藤岡博士……芳賀矢一　八二
○一四　熊野落……太平記　八六
一五　年頭所感……夏目漱石　九二
一六　物の初め……幸田露伴　九八

○一七　行く川の流れ……方丈記　一〇三
○一八　日本趣味……佐々政一　一〇六
一九　四季の修養……加藤咄堂　一一六
○二〇　徒然草より……兼好法師　一一九
をりふしのうつりかはるこそ……一二九
子を法師になして……一三三
二一　成功とは何ぞや……浮田和民　一三七
二二　自發の工夫……德富蘇峰　一三三
○二三　雅文三篇……一三九
月のさしのぼるころ……松平樂翁　一三九
壬子試筆の詞……室鳩巢　一四〇

隨時樓の記……村田春海 一四
○二四 出盧（詩）……土井晩翠 一四六
○二五 洛陽と長安……内藤湖南 一四九
二六 國民的自覺……大住嘯風 一五八

中等新國文卷八目次終

中等新國文　卷八

徳富蘇峰
名は猪一郎
文久三年熊本生
文章家
評論家
國民新聞社長
貴族院議員

一　乃木大將の殉死

徳富蘇峰

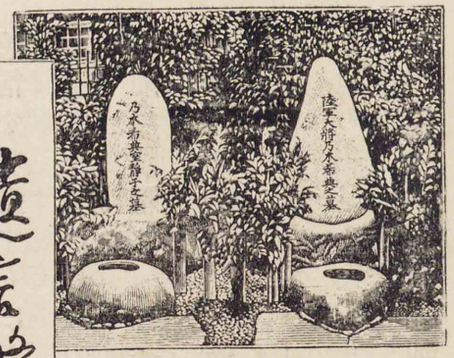
乃木大將の自殺は、深夜の警鐘の如く、青天の霹靂の如く、多大深甚なる印象を天下に與へたり。何人も、苟くも心ある者は、皆自己に與へられたる一大鐵鎚として之を受用するを禁ずる能はず。而も若し乃木大將自殺の目的此に存すといはゞ、これ決して大將の本意にあらじ。恩賞は功勞に伴なふ。而も若し恩賞を邀へんが爲に身を致して君國に奉ずといはば、これ忠臣義士の心を以て單に商賣根性視するものなり。大將の一死を我に

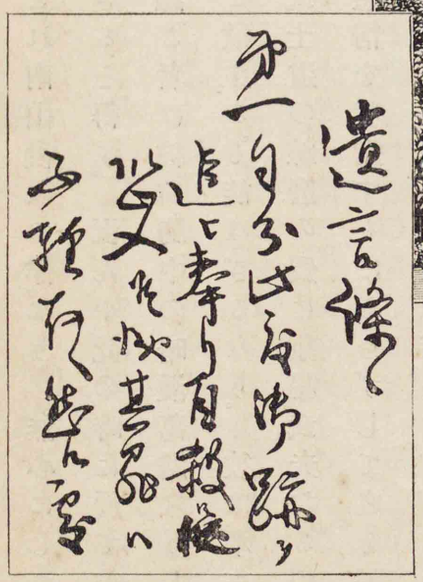
善用し、國に善用し、世道人心に善用するは、吾人の責任なり。されど、後人に教訓せんが爲に、時世を警醒せんが爲に、汚風墮俗に大鐵槌を下さんが爲に、特に自殺したりといふに至りては、これ乃木大將の心事を誣ふるや亦甚だし。

吾人の所見によれば、大將自殺の理由は其の遺言書第一條に於て盡くされたり。曰く、

自分此度御跡を追ひ奉り、自殺候處恐入候儀其の罪不輕存候。然る處、明治十年役に於て軍旗を失ひ、其の後死處を得度心掛け候へども其の機を得ず、皇恩の厚きに浴し、今日迄過分の御優遇を蒙り、追々老衰、最早御役に立ち候時も無餘日候折柄此度の御大變、何とも恐入候次第、茲に覺悟相定め候事に候。

と。大將自殺の行徑や此の如く明白なり。其の心事や此の如





遺言狀

く光明なり。豈、紛々聚訴の餘地あらんや。」

吾人はこゝに乃木大將の事歴を説くの煩を要せず。彼は事あるごとに其の死處をたづねたるに相違なし。三十七八年役に於て彼は二兒と共に家を出で、三棺並べざれば葬送するなかれと家人に戒めたりき。而も彼も亦人の父なりき。

山川草木轉荒涼。
十里風腥新戰場。
征馬不前人不語。
金州城外立斜陽。

これ南山役後の作なり。無心にして之を讀むも、なほ黯然たらざるを得ず。況んや此の時に於て彼の一子を失うたる事實を識る者は、彼が胸中の暗淚萬斛なりしを察して、自ら泣かざらんと欲するも能はざるなり。彼は本來多恨多情の好漢なり。唯武士道の錬磨の爲に剛腸武夫たるのみ。日本武士道の精華は、感情を發露するにあらずして之を壓抑するにあり。一首二十八字、字々これ血液の結晶なり。

旅順攻圍軍は今古未曾有の慘烈なる經驗を嘗めたりき。中隊大隊はおろか、殆ど聯隊の全滅さへも繰返したりき。而して豫期より半歳を超過して、漸く開城を見るに及べり。此の役にまた他の一兒を失へり。此の如くして二棺は豫期の如く出來たり。他の一棺は如何。

一將功成云々
澤國江山入二戰圖一、生民何計樂二樵蘇一、憑レ君莫レ話封侯事、一將功成萬骨枯
（唐の曹松の詩）

先帝
明治天皇

皇師百萬征二强虜一　野戰攻城屍作レ山。
愧我何顏看二父老一。　凱歌今日幾人還。

彼は實に、「一將功成萬骨枯」の事實を痛切に感じたり。彼の鋭敏なる良心責任心廉恥心は、又もや彼を驅りて幾回か自決せしめんと欲したりき。されど彼は、餘儀なく其の死處を待てり。

三十七八年以後の乃木大將は、殆ど軍服を纏うたる聖僧たりき。而も獨善は彼の屑しとする所にあらず。彼や結髮以來、尊王愛國の大義を聞き、治國平天下の大道を學ぶ。滔々たる世潮に對して、固より沒交渉なる能はざりき。されば及ぶ限りは之を支持し、之を矯正し、彼の所謂躬づから行ふ所を以て之を他に及ぼさんと欲したりしや明らけし。而して彼を學習院長に擢用し給ひたるは、これ先帝の明鑑にして、眞に適材を適所に措き給ひ

たるものなり。

彼や先帝の知遇を辱うし、特に三十七八年役以來、彼の孤獨なる家庭、淡枯なる生活、自損利他の行徑、奉公獻身の精誠は、深く先帝の鑑奬嘉諒し給ふ所となり、或は彼を軍職に大用せんとの議を上る者ありしかども、先帝は固く執りて容し給はざりし程なりき。これ彼を以て人の師表たるべき者と御推信ありしが爲のみ。彼の進路や曲折頓挫、決して和易輕快なりと言ふを得ず。而も其の晩節に於て聖天子の知遇を辱うす。彼や實に鞠躬盡瘁、老いの將に至らんとするを知らざりしが如し。

然るに思ひきや、御發病となり遂に崩御とならんとは。何人も彼の心中を知る能はず。されど彼や若し祈るべきものなりせば、畏れながら身を以て代らんと祈りしに相違なからん。彼は

最後まで御平癒を信じたりき。而してそれさへ水泡に歸したり。彼が此に於て一死を以て先帝に殉じたるは、餘人に於ては いざ知らず、彼に於ては極めて自然なり。彼や死處を求めて死處を得たり。單に死處よりすれば、南洲の企て及ぶところにあらず。名を求むるにあらず、奇を衒ふにあらず、何ぞ況んや他人に當てつくるに於てをや。

うつし世を神さりましし大君の
御跡したひて我はゆくなり

たゞ此の如きのみ。これ以上の解説や註釋や、これ蛇足のみ。

蓋し乃木大將は先帝に殉じ、其の夫人は大將に殉ず。彼等夫婦の死は、宛も先帝大喪儀の最も莊嚴悲哀なる誄歌を合奏したるものなり。此の如くして豫期せられたる三棺は、豫期せられざ

る機會に四棺となりぬ。乃木家闔門、皆國事王事に斃る。明治大正の過渡に於ける、血を以て描ける千古不朽の一大悲史は、此の如くして出で來れり。嗚呼哀しいかな。

二　人臣の道

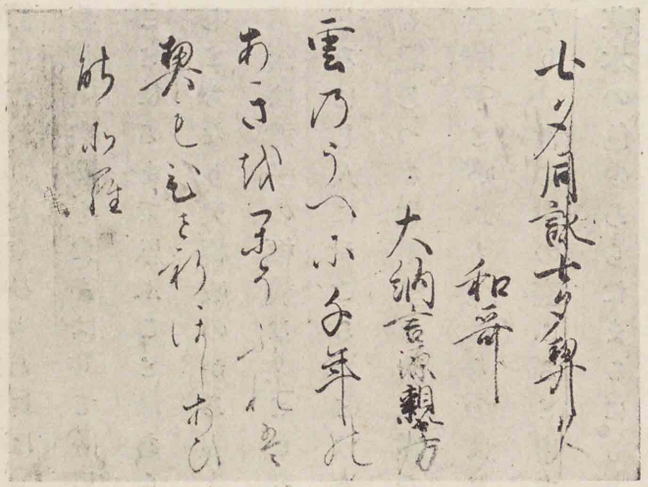
神皇正統記

およそ王土にはらまれて忠をいたし命を棄つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。しかれども、後の人を勵ましその迹をあはれびて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ爭ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして過分の望をいたすこと、みづからあやぶむるはしなれど、前車の轍を見ることは誠にありがたきならひなりけむかし。中古までも、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強に

神皇正統記
六卷、北畠親房の著、神系皇統によつて其の御事歴を記したもの。

前車の轍云々
前車覆、後車戒、（周書）

なりぬれば、必ずおごる心あり。果して身をほろぼし家をうしなふためしあれば、戒めらるゝもことわりなり。鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬することをとゞむべしといふ制符度々ありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて、諸國の兵を召し具しけるに、近代となりて、やがてかたらはるゝやから多くなりしによりて、この制符は下されき。果して今までの亂世の基なれば、いひがひなきことになりにけり。」



七夕同詠七夕契久　和歌
大納言源親房
雲のうへに千年のゝきをかそふれは契もひさしほしあひのそら

言語は云々
言語君子之樞機（易經）

堅き氷云々
履レ霜堅氷至（易經）

許由
支那の箕山に隱棲してゐた賢者

「この頃よりのことわざには、一度軍にかけあひ、或は家の子郎從節に死ぬるたぐひもあれば、わが功におきては日本國をたまへ。」若しは「半國をたまはりても足るべからず。」などぞ申すめる。まことにさまで思ふことはあらじなれど、やがて之より亂るゝはしともなり、又朝威のかろ〳〵しさもおし量らるゝものなり。

「言語は君子の樞機なり。」といへり。あからさまにも君をないがしろにし、人におごることはあるべからぬことにこそ。さきにも記しつる如く、堅き氷は霜を履むよりいたるならひなれば、亂臣賊子といふものは、そのはじめ心詞を愼まざるより出でくるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光のかはるにもあらず、草木の色のあらたまるにもあらじ。人の心のあしくなり行くを末世といへるにや。昔許由といふ人は、帝堯の國を傳へむと

巢父
許由と同時代の高士

ありしを聞きて潁川に耳を洗ひき。巢父はこれをきゝて、この水をだにきたながりて渡らざりき。その人の五臟六腑のかはるにはあらじ。能く思ひならはせる故にこそあらめ。

なほゆく末の人の心、思ひやるこそあさましけれ。大かたおのれ一身は恩にほこるとも、萬人の怨みを殘すべきことをば、などか顧みざらむ。君は萬姓の主にてましませば限りある地をもちて限りなき人にわかたせ給はむことは、おしても量り奉るべし。もし一國づゝを望まば、六十六人にて皆ふさがりなむ。一郡づゝといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は悅ぶとも千萬の人はよろこばじ。況んや日本の半ばを志し皆ながら望まば、帝王はいづくをしらせ給ふべきにか。かゝる心の萠して、言葉にもいだし、おもてにも恥づる色のなきを謀叛

のはじめとはいふべきなり。　將門は、比叡山に登りて大内を遠見して、謀叛を思ひ企てけるも、かゝるたぐひにやありけむ。　昔は人の正しくて、將門に見も懲り、聞きも懲りけむを、今は人の心かくのみなりにたれば、この世はいよ〳〵衰へぬるにや。

漢の高祖　劉邦のこと。秦を滅して天下を統一した

漢の高祖の天下を取りしは、蕭何・張良・韓信が力なり。　これを三傑といふ。　萬人に勝れたるを傑といふとぞ。　中にも張良は高祖の師として、「はかりごとを帷幄の中に運らして、勝つことを千里の外に決するはこの人なり。」と宣ひしかど、おごることなくして、留といひて、すこしきなる所を望みて封ぜられにけり。　あらゆる功臣多くほろびしかど、張良は身を全くしたりき。　近き代の事ぞかし。賴朝の時までも、文治の頃にや、奥の泰衡を追討せしに、みづから向ふことありしに、平重忠が先陣にてその功勝れた

はかりごとを云々　高祖曰、運二籌策帷幄之中一、決二勝於千里之外一、吾不レ如二子房一。（史記）

奥の泰衡　陸奥の藤原泰衡

平重忠　畠山重忠

りければ、五十四郡の中いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、極めたるすくなき所を望み、賜はりけりとぞ。　これは人にひろく賞をも行はしめむが爲にや、賢かりけるをのこにこそ。

直實　熊谷直實

又直實といひける者に一所を與へ給ふ下文に、「日本第一の剛の者なり。」と書きて賜ひてけり。　一とせ彼の下文をもちて奏聞する人のありけるが、「褒美の詞の甚だしきに、與へたる所のすくなき、まことに名を重くして利を輕くしける、いみじき事。」と、口々に譽めあへりけり。　いかに心得て譽めけむと、いとをかし。　これまでの心こそなからめ、事に觸れて君をおとし奉り、身を高くする輩のみ多くなれり。　ありし世の東國の風儀も變りはてぬ。　公家のふるき姿もなし。　いかになりぬる世にかと、歎くともがらもありとぞ聞えし。

宗良親王
後醍醐天皇第八皇子、天台座主となり給ひ、後王事につくし給うて、長く信濃に坐した。

元弘
元弘元年には後醍醐天皇笠置山に行幸

弘和元年
長慶天皇即位十四年

世尊寺
上の千本あたりにあつた、今は廢寺。

三　新葉和歌集

後醍醐天皇の皇子宗良親王、歌に堪能なり。將軍として外に戰ふ際にも、吟詠を廢し給はず。元弘以來弘和元年までの名歌を撰びて新葉和歌集と題し給ひけるに、長慶天皇之を勅撰に準じ給へり。新葉集はかゝる次第にて出來たれば、從つて吉野山に關する哀れなる歌も少なからざるなり。

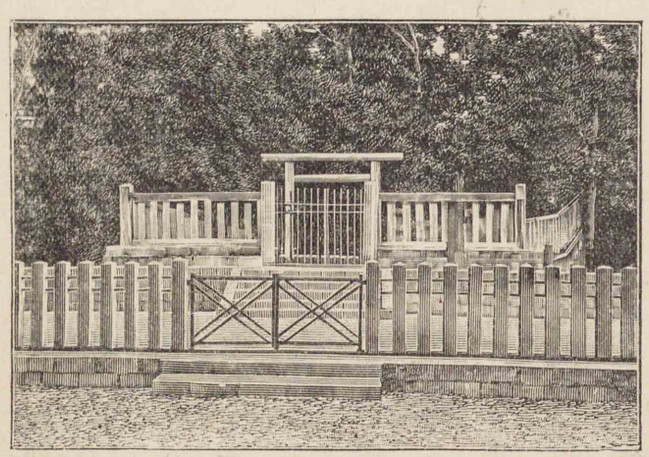
こゝにても雲井の櫻さきにけり
たゞかりそめの宿とおもへど

これ後醍醐天皇の御製なり。吉野の世尊寺に雲井の櫻と稱する一株あり。雲井は禁中をいふ。さらでだに舊禁中の戀しくして堪へ給はざるに、吉野山中雲井と稱する櫻を御覽じては、豈

延元陵
後醍醐天皇の御陵である、天皇の崩御が延元四年であつたから延元陵と稱し奉る。

中院入道
北畠親房

業平朝臣に云々
名にしおはばいざことはむ都鳥我が思ふ人はありやなしやと
（伊勢物語）



延元陵

感無量ならざるを得んや。悲しい哉、かりそめの御宿つひの御宿となりて、延元陵畔長へに遊子をして涙に襟を沾さしむ。中院入道は、同じ雲井の櫻を詠じて、

吉野山雲井の櫻君が代に
逢ふべき春や契りおきけむ

隅田川に浮かべる都鳥も、都といふことを名に負ふが爲に業平朝臣に都の事を問はれしが、今はその名の如く江戸の地が都となりぬ。吉野の雲井の櫻も、吉野の地に雲井が出來て、名實相應ずるやうになりたり。花の仕合はせ

京都に還らせ給ひし時の云々
正平十六年十二月一度京師を復し給うたが、翌年一月再び吉野に還幸し給うた。

は卽ち南朝の君臣の不仕合はせ、造化の配劑亦奇なるかな。

吉野山花も時得て咲きにけり
都のつとに今やかざゝむ

これ後村上天皇の御製なり。山櫻を土產にして京都に還らせ給ひし時の御嬉しさはさぞと思はるれど、やがて又京都を保ち給ふこと能はずして、再び吉野に遷らせ給ひし時の御失望や如何なりけん。

我が宿と賴まずながら吉野山
花になれぬる春もいくとせ

これ長慶天皇の御製なり。後醍醐天皇の皇孫、後村上天皇の皇子、吉野の山中に人となり給ひ、父祖の御遺志を嗣ぎ給はんの御志切なりしが、南風競はず、竟に御志を遂げ給ふこと能はざりき。

あはれ幾春御心ならず吉野の花を眺めさせ給ひけん。

この天皇の御母を嘉喜門院と申しまつる。その御歌に、

櫻花さきてとく散る習ひこそ
我が身の春のもの思ひなれ

昨日は紅顏今日は白頭、人生の老い易きは男子とても悲歎に堪へざるに、況して女性の御身、櫻花の散り易きさまを見給ひて、いかに御身をはかなくおぼし給ひけん。

故里は戀しくとてもみ吉野の
花の盛りをいかゞ見すてん

これ新葉集の撰者なる宗良親王の歌なり。詩人の雅懷を見る。されど、花散らば又いかに都の戀しかるらん。

嘉喜門院は歌を善くし給ふのみならず、最も琵琶に長じ給へり。

されど後村上天皇崩御の後は悲哀に堪へず、誓つて琵琶を彈き給はざりき。然るに天授三年七月七日、吉野の行宮にて樂を張り給ひけるが、樂をはりて後、長慶天皇門院に向ひて一曲をと切に乞ひ給ひければ、門院も恩愛の情にほだされて、一曲を奏で給ふ。その時の御製に、

かくてのみ絶えず聞かばやそのかみの
あきおもほゆるみねのまつかぜ

昔この琵琶を聽きて御心を慰め給ひけん父天皇今はおはさず、母君の琵琶が亡き父天皇の形見なり。門院の御返しに、

あはれとも君ぞ聽きける今ははや
吹きたえぬべき峰のまつかぜ

「わが餘命いくばくもなし、君が昔を忍ぶといふ琵琶の音も、やがて聽き給ふに由なかるべし。」となり。二首いづれも意あはれにして詞も妙なり。宗良親王これを評して、「古の勅撰集中の唱和に比して毫も遜色なし。」と、これを新葉集に收めたまへり。

（大町桂月の文に據る）

大町桂月
名は芳衛
高知の人
文章家
大正十四年歿
年五十七

姉崎正治
明治七年京都市生
宗教學者
文學博士
東京帝國大學教授

到彼岸
生死煩惱の岸を出離して、涅槃の岸に到ること。

諸大
地水火風の四大元素のこと

四 光あれ

姉崎正治

生滅息む事のない我々の生命には、其の流轉還滅の中に、各〻永遠の光明、不朽の生命を宿してゐる。一々の現實には理想の生命があり、天然自然の中に已に到彼岸の姿はある。肉體を維持せる色々の物は、皆地水の中から得る食物から來てゐる。而して此等の地水の諸大は、皆同じ此の世界の中を流轉循環して、地から植物の根に入つては莖をも花をも養ひ、茄子も甘蔗も、昆布も

葛の根も、皆共に我々の肉體の生命を養ふ。草木の吐いた空氣を動物が吸入るれば、人間の身體を通つた水で米禾は育つ。生命活力は此の樣にして天地の間を流轉して、植物と動物と人間と、皆共通の養分に生命を維持し、相助け相和してこの生命を營む。今日の人はこの現象を指して生存競爭だなどいつて、其の功能を說く人もあれば、其の苦痛を訴へる者もあるが、豈圖らんや、競爭の根本裏面には大調和大融通大和合が行はれつゝあるのである。

そして、この大融和は獨り肉體の上ばかりでなく、精神の上には一層弘く、一層强く、又一層自由に、一層切實に、その力を現はしつつある。楠公が櫻井驛で流した涙の水を、今瓶に詰めて人に示すことは出來ないかも知れぬが、我々はその涙を嘗め得る。十

字架の上に流れたキリストの血は、生命の流れになり、四方に溢れて千古に枯れぬ。殉教者の血に塗れた處には、新たな信仰の花を咲かせた。信の心ある人には、庭に匂ふ藤の花にも淨土の紫雲がたなびき、柴の戸にかゝる狹霧もいつか紫の雲になり、衆生の爲に泣いた聖者の、聲は立てないでも其のひまなき涙には、天下に風雲を呼起す大獅子吼の力がある。生命の流れは、うたかたの且消え且結んで暫くも止まらない樣であるが、その結びつ消えつ流轉する中に、大きな生命、不磨の活力を現はしつゝ、宇宙の萬象に通じ、東西古今を貫いて大融和を遍流しつゝある。

この遍流の大生命を、理性の鏡に寫しとつて、之を人に示すのが哲學。實行の規矩標準をこの大生命に置いて、人をして私を棄てて公に就かしめ、個人の生命を大道の生命に隨順せしめるの

が道德。この大融和の實を直ちに自己の人格に體得し、生滅の一生の中にも永遠の生命を發現し、人の中に直ちに融通和合の大道を現はすのが卽ち宗教。而して藝術は卽ち此の生命光明を一々の事象、一々の人物・性格・境遇・美醜・好惡・喜怒・哀樂に發表して、人をして具體特別の中に遍通を見しめ、現實中に理想を仰がしめる力である。

哲學・道德・宗教・藝術、此等人生の光明があるに因つて、我々は流轉生滅の現實中に永遠の生命を窺ひ、仰ぎ、慕ひ、味はひ、行ひ得る。その方面・方法、從つて發表の結果は異なるやうでも、人生の力としては一つ、事實の人生を捕へ、その生命の實相を發輝するに至つては、二段あるべきでない。辛い唐辛も甘い甘蔗も、一つの水に養はれ、一つの日光に育てられる。その辛いは辛いながらの

中に、甘いは甘いながらの中に、一貫の生命はある。植物學者は生理として、化學者は化合として、此の消息を我々に說明してくれる。天地一碧の夏の空色が瞳孔を通り、網膜に映じ、視神經を通つて、それから腦髓に起る變化が、一方では精神の開豁な感じとなる。この物と心との交通を、哲學者は物心共通の原理に訴へて解釋しようとする。寫し取る鏡は違ふやうであつても、遍流の生命は唯一つである。道德の實行、宗教の信仰、姿は異なつても實は一つである。行によつて道を代表するのと、躬親（ミミヅカ）らの人格に等流遍通の生命を實現するものとは、共に人間の個性の中に現はれる理想の生命である。といつても、現實に反對してのの理想でなく、事實の人生、生命の事實が直ちに理想となるのである。藝術の生命も、亦事象の個性に現はれた理想にある。

流轉還滅の相は相として、刹那生滅の事は事として、而もその事相の中に生命の事實を認め、人生の實力を見、而してこの生命を特別の事柄や個性の發展個人の境遇に現はす。還滅の滅に却つて不滅が宿り、刹那の發露に久遠の光が見える。之を發見し、之を一定の作品に作り出すのは藝術の創作力。この創作の意を得、相を汲んで、同じ光明の中に遊び、同じ生命を自覺する、これが卽ち藝術の享樂である。草花に戯れる蝶一つにも春風の駘蕩が宿り、萩の下葉の露にも秋の哀れは見える。これが畫にもなれば歌にもなる。水に鳴く蛙にも花を縫うて歌ふ鳥にも、趣もあれば詩もある。まして人間が個々の性格境遇に應じて驚き、惱み、鬪ひ、仆れ、勝ち、喜び、哀しみ、怒る、樣々の事實の世相には、尙強く尙深い生命が宿つてをる。その生命を發輝する藝術は天

水に鳴く蛙
花になく鶯水にすむ蛙の聲をきけばいきとしいけるものいづれか歌をよまざりける（古今集の序）

然にしても人事にしても、直接に生命の根柢內容に觸れなければならぬ。あつた事若しくはあり得る事を基にしなければならぬ。（光あれ）

五　道友に答ふ

綱島梁川

御書うれしく幾度も繰返して拜誦、唯々言ひがたき喜ばしさと感謝もて心躍り申候。御封入の春蘭、淸香さと迸りて書齋の裏しばしは神の宮居のごとく、凜乎たる心地いたし候。委しき御現狀承はり、我が身の上の事のやうに思はれ候うて、しみ〴〵と讀入り申候。いつもながら野趣野情に滿ちたる御文は、年中觀念の小室に閉籠れる小生に取りて、こよなき救ひに候。大いなる自然の中にして、心ゆくばかり趣味の太源と道交し給へる兄

綱島梁川
備中の人
名は榮一郎
思想家
明治四十年歿
年三十五

の御境遇は、羨ましくも候かな。まゝならぬ身世、色々と御感慨も候べし。小文人の虚名云々、御同感に候。何人も少し眞面目に立たんと思ふ者は、幾多の煩悶と悟達とを要し候べく唯、常流の士は、感慨餘りありて一躍蟬蛻の決志なく、一生心ならずも、目に見えぬ習慣の繩に縛られて終るものに候。凡夫の悲しさとは申せ、我等の大いに心すべきことに候はずや。

綱島梁川

嗚呼我等、無くてならぬものは唯一つ。この一つをだに眞實に攫み候はば、一切を糞土の如くに抛つ大勇猛心大安心大歡喜を得べく候。小生は、御手紙を得候ごとに、いつも兄が御道心の向上を嬉しく存じ候。兄がこの一味堅實なる自覺の發展は、やが

て小生が自覺の發展に候。誰かこの一味同體の自覺のよろこびを隔離するものあらん。

小生昨暮よりしばらく神經衰弱に惱まされ、終日昏々として沈睡に陷り候やうの事も候ひしが、一週間ばかり前より元氣恢復、この分ならば、遠からず例の車上行樂の折も來るべしと存じ居り候。御心に懸けさせらるまじく候。暫く遠ざかりをりしスピノーザ、この頃また〳〵親しく枕頭の友と相成り候。小生は、スピノーザの哲學思想や、その學究式なる文體などに服しかね候所もこれあり候へども、その堪へがたき病苦の中に在りながら、一切の虚名煩惱を脱して、一念ひとへに永劫の眞理にあこがれたる生活は、小生をしてあらゆるへだての籬を撤して、彼をいだかしめ申候。げに、世に彼ばかり冷頭熱意の人はあるまじく、

スピノーザ
オランダの哲學者、汎神説を奉じた。
（西暦一六三二―一六七七）

彼が大いなる思想の海は、一碧萬頃の靜けさを湛へながら、その千尋の底には、思慕限りなき熱情の潮、滾々として涌き且流れをり候。小生は、彼に對し候ごとに、その個人的といひ、超世間的といひ、甚だしきは利己的とさへ言はるゝ世の一種の非難を思ふの遑これなく候。

日本の詩人中、最も慕はしきは芭蕉翁に候。彼は如何にしても尋常一樣の自然詩人にはこれなく、深く自然の源に神契道交せし高調これあり候やう存ぜられ候。彼が屢〻人間に自然にうち灑ぎし涙は、神々しき法涙と申すべき所あり。而して又、彼が解脫は枯禪者流の解脫にはこれなきやうに候。一俳人と言ふ勿れ。今日の文壇、一人の彼が如き醇乎たる詩人的人格を有し候ものありや。彼が如き慈愛の德望高き詩人ありや。彼が如き

芭蕉の旅魂云々　旅に病んで夢は枯野をかけめぐる　蕉翁最後の句

東關紀行　作者未詳　後嵯峨天皇の仁治三年の八月京都より鎌倉に行つた間の紀行文

駒ひきわたる望月　逢坂の關の清水にかげ見えて今やひくらん望月の駒（拾遺集、紀貫之）

法味法涙を湛へたる清香の詩人ありや。

小生はかねてより、一度芭蕉の面目を心ゆくばかりに描いてみたしと存じ居り候。兄よ、兄の日夕親しみたまふところ、卽ち芭蕉の旅魂が死に至るまでかけ廻りし所ならずや。兄は兄が自然に對する趣味ある清新の筆を以て、芭蕉が曾て到りし、又到らんとして到り得ざりし高き標的に、兄自らの特殊の形式を以て進みたまはんとはせずや。草々。（回光錄）

六　東路の旅

東關紀行

東山の邊りなるすみかを出でて、逢坂の關打過ぐる程に、駒ひきわたる望月の頃もやう〳〵近き空なれば、秋霧たちわたりて、深き夜の月影ほのかなり。木綿付鳥かすかに音づれて、遊子なほ

遊子なほ云々
遊子猶行二於殘月一、函谷雞鳴。（文選、賈島）

蟬丸
敦實親王の雜色であつた琵琶の名手

藁屋
世の中はとてもかくても過してん宮も藁屋もはてしなければ（今昔物語、蟬丸）

打出濱
今の大津市阪本石湯邊の古名

飛鳥の岡本宮
大和國高市郡岡村にあつた、齊明天皇の二年から天智天皇の六年まで十二年間の皇居

殘月に行きけん函谷の有樣思ひ出でらる。昔蟬丸といひける世捨人、この關のあたりに藁屋の床を結びて、常は琵琶を彈きて心をすまし、和歌を詠じて懷ひを述べけり。嵐の風の烈しきを侘びつゝぞ過しける。

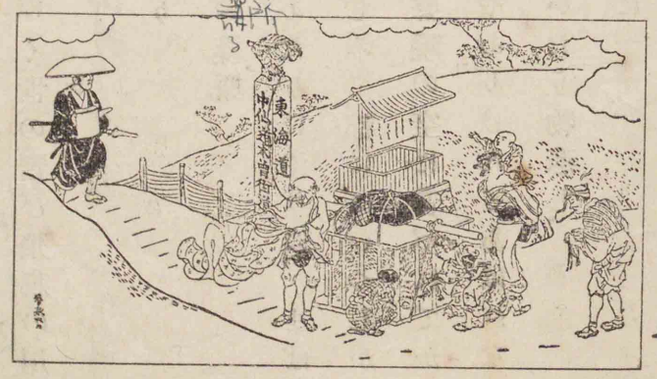
いにしへの藁屋の床のあたりまで
心をとむるあふさかの關

關山を過ぎぬれば、打出濱、粟津原なんど聞けども、未だ夜の中なれば、さだかにも見え分かず。昔天智天皇の御代、大和の國飛鳥の岡本の宮より近江の志賀の郡に都遷りありて、大津の宮を造られけりと聞くにも、このほどは古き皇居の跡ぞかしと覺えてあはれなり。

さゞ波や大津の宮のあれしより

南山の影
昆明春昆明春、春池岸古春流新、影浸二南山一、青滉瀁、波沈二西日一紅淵淪。（白氏文集）

この程をも行きすぎて、野路といふ處に到りぬ。草の原露繁くして、旅衣いつしか袖の雫ところせし。篠原といふ處を見れば、西東へ遙かに長き堤あり。北には里人住家を占め、南には池の面遠く見え渡る。向ひの汀、緑深き松のむらだち波の色も一つになり、南山の影を浸さねども、青くして滉瀁たり。洲崎處々に入りちがひて、葦かつみなどおひ渡れる中に鴛鴦、鴨の打群れて飛びちがふさま、葦手を書けるやうなり。昔都を立つ旅人名のみ殘れる志賀のふる里



篠原附近（東海道旅行圖繪）

飛鳥の川の云々
世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀬になる（古今集、讀人不知）

武佐寺
近江國蒲生郡武佐村にあつて今長光寺といふ。

とこの秋風
近江口坂田郡鳥居本村の南にとこ（鳥籠）の山がある

遺愛寺云々
日高睡足猶慵レ起、小閣重レ衾不レ覺レ寒、遺愛寺鐘欹レ枕聽、香爐峯雪撥レ簾看。（白氏文集）

この宿に泊りけるが、今は打過ぐるたぐひのみ多くして、家居もまばらになりゆくなど聞くこそ、變りゆく世の習ひ飛鳥の川の淵瀬には限らざりけりと覺ゆれ。

行く人もとまらぬ里となりしより
荒れのみまさる野路の篠原

ゆき暮れぬれば、武佐寺といふ山寺のあたりに泊りぬ。まばらなるとこの秋風、夜更くるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きかへたるこゝちす。枕に近き鐘の聲、曉の空に音づれて、かの遺愛寺の邊りの草の庵の寢覺もかくやありけんとあはれなり。

行末遠き旅の空、思ひ續けられていたう物悲し。

都出でていくかもあらぬ今宵だに
かたしきわびぬとこの秋風

柏原
美濃國坂田郡

音に聞きし醒が井を見れば、蔭暗き木の岩根より流れ出づる清水、あまり涼しきまですみ渡りて、げに身にしむばかりなり。餘熱未だ盡きざる程なれば、往還の旅人多く立ちよりて涼みあへり。かの西行が、

道のべに清水流るゝ柳かげ
しばしとてこそ立ちとまりつれ

と詠めるもかやうの處にや。

道のべの木蔭の清水むすぶとて
しばしばしすゞまぬ旅人ぞなき

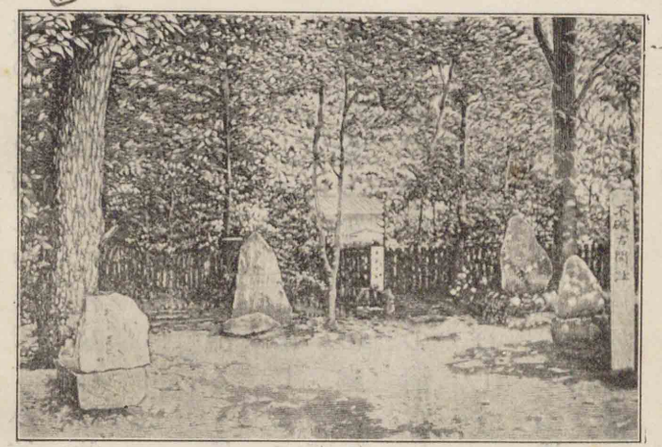
柏原といふ處を立ちて、美濃の國關山にもかゝりぬ。谷川霧の底におとづれ、山風松の梢にしぐれわたりて、日かげも見えぬ木の下道、あはれに心ぼそし。越えはてぬれば不破の關屋なり。

後京極攝政
藤原良經
荒れにし後
人すまぬ不破の
關屋の板びさし
あれにし後はた
゛秋の風（新古
今集）

照る月なみ
水のおもに照る
月なみをかぞふ
ればこよひぞ秋
の最中なりける
（拾遺集、源順）

二千里の外云々
三五夜中新月
色、二千里外故
人心。（白氏文
集）

萱屋の板庇年經にけりと見ゆるにも、後京極攝政殿の「荒れにし後はた゛秋の風。」とよませたまへる歌おもひ出でられて、この上は風情もめぐらし難ければ、鄙しき言の葉をのこさんもなか〳〵に覺えて、此處をば空しく打過ぎぬ。」



株瀬川といふ處にとまりて、夜ふくるほどに川端に立出でて見れば、秋の最中の晴天、清き川瀬にうつろひて、照る月なみも數みゆるばかりに澄みわたれり。「二千里の外の故人の心」思ひやられて、旅の思ひいと゛抑へ難く覺れば、

紀貫之
歌人
天慶九年歿
年六十五
古今和歌集の撰
者

紀友則
歌人
古今和歌集の撰
者
延喜五年歿
年六十一

「月の影に筆を染めつゝ、花洛を出でて三日、株瀬川に宿して一宵、しば〳〵幽吟を中秋三五夜の月に傷ましめ、かつ〴〵遠情を前途一千里の雲に送る。」など、ある家の障子に書きつくるついでに、

知らざりき秋のなかばの今宵しも
かゝる旅寢の月を見んとは

七 春日野

紀貫之

春日野のわかなつみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらん

紀友則

ひさかたの光のどけき春の日に靜心なく花の散るらん

凡河内躬恒
歌人
古今和歌集の撰者
延喜七年歿
年四十九

素性法師
俗名良峰玄利
歌人
清和天皇より醍醐天皇頃までの人

僧正遍昭
俗名良峰宗貞
六歌仙の一人
寛平二年寂
年七十五

春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ　凡河内躬恒

思ふごち春の山邊にうちむれてそこともいはぬ旅寝してしが　素性法師

はちす葉のにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく　僧正遍昭

昨日こそ早苗とりしかいつのまに稲葉そよぎて秋風の吹く　讀人知らず

在原業平
阿保親王の第五子
六歌仙の一人
元慶四年歿
年五十六

藤原敏行朝臣
歌人
延喜七年歿

壬生忠岑
歌人
古今和歌集の撰者
康保二年歿
年九十八

文朝朝康
歌人
康秀の子

大方は月をもめでじこれぞこのつもれば人の老いとなるもの　在原業平朝臣

秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる　藤原敏行朝臣

久方の月のかつらも秋はなほもみぢすればや照りまさるらん　壬生忠岑

秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくる蜘蛛の絲すぢ　文屋朝康

我がために來る秋にしもあらなくに蟲の音きけばまづ
ぞ悲しき

讀人知らず

八 秋の本質

豐島與志雄
明治二十三年福岡縣生
小說家

秋といへば、人は直ちに紅葉を聯想する。しかしながら紅葉そのものは、秋の本質とはかなりに緣遠いことを私は思はずにはゐられない。

楓の赤色から銀杏の黃色に至るまでのさまざまな紅葉の色彩、その色彩からぢかに來る感じは、しみ〴〵とした專念の秋の感じとは餘程距つてゐる。都會にゐてはさうでもないけれど、一歩田舍に踏出してみると、山裾の木立の紅葉や、田畑の熟しきつ

た黃色い農作物や、赤々とさす日脚などは、それをそのまゝ抽出して觀ずる時には、寧ろ殘暑に屬すべきもので、眞の秋の領域ではない。試みに我々の住宅や居室を、それらの色彩のいづれかで塗りつぶすとしたならば、我々の生活氣分はかなりに落着きのないものとなることであらう。そしてこの落着きのなさは、秋の賴りない氣分とは全く別種のものである。

紅葉に秋の氣分を與へるものは、紅葉のうちの活力の缺如である。私はこゝに綠葉が何故に紅葉するかといふ科學的の說明を持出したくはない。たゞ紅葉に活力のないことだけを言ひたい。假に野山の紅葉があるまゝの色彩で生々と生育する世界を想像してみれば、それが秋の世界だとは誰もいひ得ないであらう。活力のない紅葉なればこそ、秋にふさはしいものとな

る。秋の山野に冠する赤や黄の色彩は、房々とした少年の金髪でばなくて、生活をしつくした初老の人の赤毛である。生活力のない紅葉は一夜の冷氣に散つて行く。そしてこの落葉こそ本當に秋のものである。庭に散落ちる桐の一葉から、林の中に舞落ちる無數の木の葉、又は半ば霜枯れた野の草葉に至るまで、悉く秋の氣分に濃く塗られてゐる。かさ〳〵と鳴る落葉を踏んで林中の小徑をたどる時、人は最も深く秋を感ずる。」

何處からともなく流れ來る微風に、常磐木の病葉（わくらは）や落葉樹の紅葉は何等の努力もなく、いかにも自然に梢から地上へと舞落ちる。地の物は地へと大自然の聲がさゝやく。しかも地面へ落ちついた枯葉は、なほそこに安住し得ないでどこともなく風のまに〳〵吹散らされる。その方向をたどつて林から出れば、收

穫後の廣々とした田畑があらはな肌を眼の屆く限り展べてゐて、霜枯の叢からは、實をつけた雜草の莖が淋しげにすい〳〵と伸びてゐる。そして人の心も己自身の肌寒い淋しさに驅られて、遠い地平線のあたりへとさまよひ行く。その地平線の彼方に淡い夢のやうな憧れの世界がある。

秋は淋しいといふのは眞實である。秋はあらゆるものの外皮を——不用なものも、有用なものも、すべて複雜多樣な外皮を自ら振ひ落さしめて、萬物を裸のまゝで突つ立たせる。秋を淋しくないといふ者は、衣服を脱いで眞裸で突つ立つ折の妙にわびしい賴りない淋しさを、鈍感のためにか、或は厚顏無恥のためにか、身に感じない底の者であるに相違ない。

かゝる落葉の——剝脫の——世界に、更に特殊な氣味を添へるもの

は、淡いながらに鋭い日の光である。やゝ南方に傾いた日脚と、北から來る冷やかな微風との爲に、その光は弱く淡くなりながらも、極度に澄みきつた空と大氣との爲に、非常に鋭くぢかに射してくる。宛も眞空の中に於けるが如くに何物にも遮られることのないその光が、いかにくつきりとして日向と影とを地面の上に投げてゐるかを見る時、人は殊に深く秋を感ぜさせられる。落葉の上の木立の影、田の畝の草葉の影、野の上の鳥の影、そして狹苦しい都會の中にあつても、苔むした庭の上の軒影障子にさす植込の枝影、それ等のものが明るい日向ときつぱり區別されてゐるのを見る時、人の心にはいひ知れぬをのゝきが傳はつてくる。

このをのゝきこそ秋の持つてゐる本來の感じである。靜まり

かへり澄みかへつてゐる剝脫の世界に、まざ〳〵と現出される明暗の區劃は、ぢかに人の心に迫つて來て、眞裸な心のうちにも、くつきりとした光と影とが投げられる。そして人は知らず識らずに、自分の心を凝視する專念のうちに入つて行く。純なものの不純なもの、澄んでゐるもの、濁つてゐるもの、それらがきつぱりと形を現はしてくる。

かゝる赤裸な凝視の眼は、それ自身の性質上未來に向けられないで、たゞあるがまゝの自分自身——過去を荷つてゐる現在の姿にのみ向けられる。そして自然も人も、秋の世界全體が自分の赤裸な姿を見守る專念のうちに沈默する。

この專念の沈默、それを堪へることが出來、それを眞に味感することが出來る者にとつてのみ、秋は淋しくも侘しくもない。そ

ここにはたゞ清淨の冥想のみがある。遠い地平線の彼方へまでさまよひ出る魂が、そのまゝの憧れを懷いて胸の中に戻つてくる。そして健やかな淸い感激が、あらゆる雜念を吹拂つて自己の存在感を强調する。

かういふ意味に於てのみ秋は讃美すべきである。そして爽快な夜明けと皎潔な月明の夜とは、何等の卑俗な氣分にも濁らされることなく、そのまゝ人の心に受けいれられる。

秋は凝視の季節、專念の季節、そして自己の存在を味はふべき季節である。秋の本當の氣魄に觸れる時、誤つた存在樣式——生活——は、一溜りもなくへし折られてしまふであらう。その代り正しい存在樣式——生活——は、益〻力强く根を張るであらう。春から夏へかけていろ〳〵な雜草に生ひ茂られた吾々の生は、秋の氣

魄に逢つて、たゞ根幹のみがまざ〳〵と露出されて、淸淨な鏡に照らし出されるのである。秋に自己を凝視して、しみ〴〵とした歡喜を味はひ得る者こそ幸なるかなである。

秋には狹苦しい書齋から、蒸暑い工場から、戸外の大氣中に出て、野や山に遊ぶがよい。遊んで、そして地面の上に横たはるがよい。大空の下、大地の上にぽつりと投出された孤獨の自己を飽くまでも見守り、そして味はふがよい。しかしながら、その時眞に秋を讃美し得る者が果して幾人あるであらうか。

平家物語
平家の盛衰をかいたもの
作者未詳

九 重盛の教訓

平家物語

太政入道は赤地の錦の直垂に、黑絲威の腹卷の、白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜の次に靈夢を蒙つて、嚴島大

平右馬助
平忠正
清盛の叔父
新院
崇德上皇
一の宮
崇德上皇の第一の皇子重仁親王
故刑部卿
清盛の父忠盛
故院
鳥羽上皇
院内
後白河上皇と二條天皇

明神よりうつゝに賜はられたりける、銀のひるまきしたる小長刀常の枕を放たず立てられしを脇にはさみ、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゝしくぞ見えし。「貞能」と召す。筑後守貞能は、木蘭地の直垂に、緋威の鎧着て、御前に畏まりてぞ候ひける。入道宣ひけるは、「いかに貞能、この事は如何思ふぞ。保元に平右馬助を始めとして、一門半ば過ぎて新院の御方に參りにき。一の宮の御事は、故刑部卿の養君にてましゝ、しかば、旁見放ち參らせ難かりしかども、故院の御遺誡に任せて、身方にて先をかけたりき。これ一つの奉公。次に平治元年十二月、信頼義朝が謀反の時、院内を取り奉つて大内にたてこもり、天下暗闇となりたりしにも、入道隨分身を捨てて、凶徒を追落し、經宗・惟方を召しいましめしに至るまで、君の御爲に既に命を失はむとす

成親
姓は藤原
平重盛の妻の兄
鹿谷に會して平家討滅を企てた人

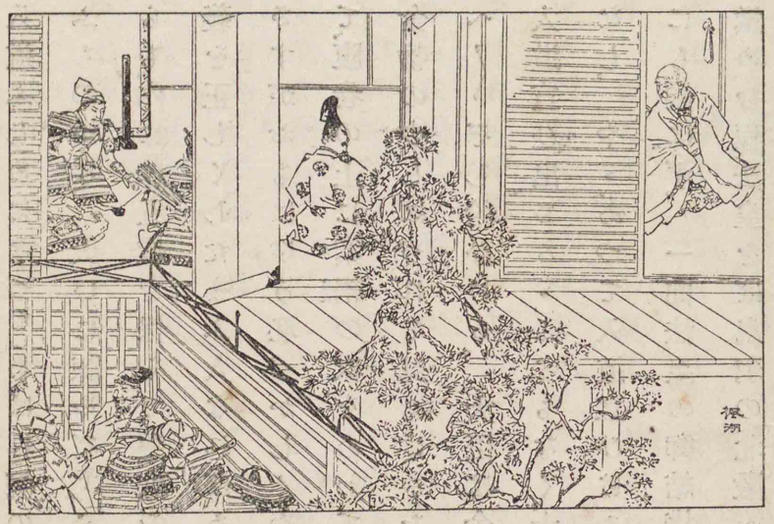
西光
藤原師光のこと
信西に仕へてから西光といつた
鹿谷會合の一人

鳥羽殿
別稱城南離宮
山城國紀伊郡鳥羽村にあつて、白河・鳥羽・後白河・後鳥羽上皇の離宮であつた。

る事度々に及ぶ。されば人何と申すとも、いかでかこの一門を七代までは思召し捨てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづらもの、西光と申す下賤の不當人が申すことに君のつかせ給ひて、動もすればこの一門滅さるべきよしの御結構こそ然るべからね。この後も讒奏する者あらば、當家追討の院宣を下されむずと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆともの益あるまじ。暫く世を鎭めむ程、法皇をば鳥羽の北殿へ移し參らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし參らせむと思ふはいかに。その儀ならば、定めて北面の者共が中より矢をも一つ射むずらむ、その用意せよと侍どもに觸るべし。大方は、入道院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍置かせよ。きせながを取り出せ。」とこそ宣ひけれ。

主馬判官盛國急ぎ小松殿へ馳參つて、「世ははやかう候。」とまをしければ、大臣聞きもあへたまはず、「あゝはや成親卿の頭刎ねられたんな」と宣へば、「その儀にては候はねども、入道殿の御きせながを召され候上は、侍どもも皆うち立つて、只今院の御所法住寺殿へ寄せむとこそ出で立ち候ひつれ。『暫く世を鎭めむ程、法皇をば鳥羽の北殿へ移し參らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし參らせむ。』とは候へども、内々は鎭西の方へ流し參らせむとこそ議せられ候ひつれ。」と申しければ、大臣何に依りて只今さる事のおはすべきとは思はれけれども、今朝の禪門の氣色、さる物狂ほしきこともやおはすらむとて、急ぎ車を飛ばせて西八條殿へぞおはしたる。門前にて車より下り、門の中へさし入つて見給ふに、入道腹卷を着給ふ上、一門の卿相雲客數十人、各〻色々の直垂

法住寺
鳥羽・後白河法皇の離宮、京都下京區三十三間堂の東方にあつた



重盛父を諫む（松本楓湖筆）

に、思ひ〳〵の鎧着て中門の廊に二行に着座せられたり。その外諸國の受領・衞府・諸司などは、緣に居こぼれ、庭にもひしと並みゐたり。旗竿ども引きそばめ〳〵、馬の腹帶をかためて、冑の緒をしめ、只今皆うち立たむずる氣色ども、なるに、小松殿烏帽子直衣に大文の指貫のそばとつてさやめき入り給へば、事の外にぞ見えられける。

五戒
偸盗・邪淫
妄語・殺生
飲酒
五常
仁義禮智信

入道ふしめになつて「あはれ例の内府が世をへうする様に振舞ふものかな。大いに諫めばや。」と思はれけれども、さすが子ながらも、内には五戒を保ちて慈悲を先とし、外には五常を亂らず禮義を正しくしたまふ人なれば、あの姿に腹卷を着て向はむこと、さすがおもはゆう恥づかしくや思はれけむ、障子を少し引きたて、腹卷の上に素絹の衣をあわてぎに着給ひたりけるが、胸板の金物の少しはづれて見えけるを隱さむと、頻りに衣の胸を引違へ〳〵ぞし給ひける。大臣は舍弟宗盛卿の座上につき給ふ。入道宣ひ出さるゝこともなく、大臣もまた申し上げらるゝ旨もなし。やゝあつて入道宣ひけるは、「あの成親卿が謀反は、事の數にも候はず。一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎭めむ程、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずばこれ

へまれ御幸をなし參らせむと思ふはいかに。」と宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はら〳〵とぞ泣かれける。入道「さていかにやいかに。」とあきれ給へば、やゝあつて大臣涙をおさへて「この仰せ承はり候に、御運ははや末になりぬと覺え候。人の運命の傾かむとては、必ず惡事を思ひ立ち候なり。又御有樣を見參らせ候に、さらに現とも覺えず候。さすが我が朝は邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫國の主として、天兒屋根命の御末、朝の政を掌らせ給ひしより以來、太政大臣の官に至る人の甲冑を鎧ふこと、禮儀を背くに非ずや。就中御出家の御身なり。それ三世の諸佛、解脫同相の法衣をぬぎ捨てて、忽ちに甲冑を鎧ひ、弓箭を帶しましまさむこと、内には破戒無慚の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にも背き候ひなむず。旁〻恐れある申

普天の下云々
普天之下莫レ非二王土一、率土之濱莫レ非二王臣一（詩經）
潁川の水に云々
支那箕山の隱士許由の故事
首陽山に云々
伯夷叔齊のこと

し事にて候へども、心の底に旨趣を殘すべきにも候はず。まづ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩是なり。その中に尤も重きは朝恩なり。普天の下王地に非ずといふことなし。されば彼の潁川の水に耳を洗ひ、首陽山に薇を折りし賢人も、勅命の背きがたき禮儀をば存知すとこそ承はれ。いかに況んや、先祖にも未だ聞かざりし太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才愚暗の身を以て、蓮府槐門の位に至る。加之國郡半ばは一門の所領となつて、田園悉く一家の進止たり。これ稀代の朝恩にあらずや。これらの莫大の御恩を思召し忘れさせ給ひて、亂りがはしく法皇を傾け參らせ給はむ事、天照大神正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなむず。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。然れば君の思召し立たせ給ふ

彼を是し云々
彼是則我非、我是則彼非。
（憲法の原文）

所、道理半ばなきにあらず。中にもこの一門は、代々の朝敵を平げて四海の逆浪を鎭むることは無雙の忠なれども、その賞に誇ることは傍若無人とも申しつべし。聖德太子十七箇條の御憲法に、『人皆心あり、心各執あり。彼を是し、我を非し、我を是し彼を非す。是非の理誰か能く定むべき。相共に賢愚なり。環の如くにして端なし。こゝを以て、假令人怒るといふとも、却りて我が咎を恐れよ。』ここそ見えて候へ。然れども當家の運命未だ盡きざるによつて、御謀反既に顯はれさせ給ひ候ひぬ。その上仰せ合はせらるゝ成親卿を召しおかれぬる上は、たとひ君いかなる不思議を思召し立たせ給ふとも、何のおそれか候べき。所當の罪科行はれぬる上は、退きて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈奉公の忠勤を盡くし、民の爲には益撫育の愛憐を致

させ給はば、神明の加護に預かつて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明佛陀感應あらば、君も思召し直すこと、などか候はざるべき。君と臣とを比ぶるに、親疎私なし。道理と僻事を並べむに、いかでか道理につかざるべき。これは尤も君の御理にて候へば、かなはざらむまでも院中を守護しまゐらせ候べし。その故は、重盛初め敍爵より今大臣の大將にいたるまで、しかしながら君の御恩ならずといふことなし。この恩の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも越え、その恩の深き色を按ずるに、一入再入の紅にも猶過ぎたらむ。然らば院中へまゐり籠り候べし。その儀にて候はば、重盛が身に代り、命に代らむと契りたる侍共少々候らむ。これ等を召具して、院の御所法住寺殿を守護しまゐらせ候はば、さすが以ての外の御大事にてこそ候はむずらめ。悲しき

迷盧
蘇迷盧山の約
別名須彌山
高さ八萬四千由
旬

富貴の家云々
夫再實之木根必傷、掘藏之家必有レ殃。（淮南子）

かな、君の御爲に奉公の忠を致さむとすれば、迷盧八萬の巓よりもなほ、高き父の恩忽ちに忘れむとす。いたましきかな、不孝の罪を遁れむとすれば、君の御爲には既に不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これ谷まれり。是非いかにも辨へがたし。申し受くる所詮は、只重盛が首を召され候へ。その故は、院參の御供をも仕るべからず、また院をも守護し參らすべからず。されば彼の蕭何は大功かたへに越えたるによつて、官大相國にいたり、劍を帶し履をはきながら殿上へ上ることを許されしかども、叡慮に背く事ありしかば、高祖重くいましめて、深く罪せられにき。かやうの先蹤を思へば、富貴といひ、榮花といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁極めさせたまひぬれば、御運の盡きむこと難かるべきにあらず。「富貴の家には祿位重疊せり。再び實なる木はその

根必ずいたむ。」と見えて候。心ぼそくこそ候へ。何時までか命生きてみだれむ世をも見候べき。たゞ末代に生を受けてかゝる憂き目にあひ候重盛が果報の程こそつたなく候へ。」只今も侍一人に仰せつけられ、御壺の内へ引出されて、重盛が頭の刎ねられむずることは、いと易き程の御事にてこそ候はむずらめ。これを各聞き給へ。」とて、直衣の袖もしぼるばかりにかきくどき、さめ〴〵と泣き給へば、その座に並みゐ給へる平家一門の人々、皆袖をぞぬらされける。入道、頼み切つたる内府はかやうに宣ふ。世にも力なげにて、「いや〳〵それまでの事は思ひもよりさうず。悪黨共の申す事に君のつかせ給ひて、如何なる僻事などもや出でこむずらむと思ふばかりにてこそ候へ。」大臣「たとひ如何なる僻事出で來候へばとて、君をば何とかし参らせ給ふべ

き。」とて、つい立つて、中門に出で、侍共に宣ひけるは、「只今これにて申しつる事共をば、汝等はよく承はらずや。今朝よりこれに候ひて、かやうの事共を申し鎭めむとは存じつれども餘りにひたり騒ぎに見えつる間、まづ歸りつるなり。院參の御供においては、重盛が頭の刎ねられたらむを見て仕れ。されば人參れ。」とて、小松殿へぞ歸られける。

高山樗牛
名は林次郎
山形縣鶴岡の人
文學博士
文藝評論家
明治三十五年歿
年三十五

平家の都落
壽永二年七月

南都の餘燼
治承四年二月平重衡が奈良法師を攻めて東大寺興福寺を燒いた墨股の勝鬪

一〇 平家雜感

高山樗牛

都落

凡そ世の中に傳へ遺されし歴史は多かれど、平家の都落ばかり哀れにもまた目覺ましきは無かるべし。

南都の餘燼未だ冷めず、墨股の勝鬪尚響きぬるに、信越俄かに雲

養和元年三月平知盛等源氏を美濃の國墨股川に破つた
木曾云々
壽永二年七月義仲が叡山に據つたことと

み吉野の云々
み吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせむ
（古今集、讀人不知）

亂れて、木曾の五萬騎はや比叡のあなたに充ち滿ちぬ。宇治・淀の備へ脆くも潰えて都も今を限りとぞ見えし。哀れ一門の天下、身を置くに處なし。世はかく憂きに、み吉野の山のあなたに隱家は無きか。いざさらば已みなん。都の中にていかにもならんよりは、西國の行幸に從ひて、一旦の凌辱を忍びなん。生死も知らぬ別路に、人の哀れの限りもなう、復歸り來

平家

六波羅
平正盛の造つた邸宅
池殿
平頼盛の邸宅
西八條
平清盛の邸宅

燒野の原
故郷を燒野の原とかへりみて末も烟の波路をぞゆく（平家物語、平經盛）

べき都としも思はねばにや、六波羅・池殿・西八條以下一門譜第の邸宅・宿房、京・白川の四五萬家を併せて、一炬の煙となし果てぬるこそあわたゞしかりしか。」

こゝに鳳闕の礎空しく殘り、椒房の跡嵐夜々悲しむ。保元此の方、天下の榮華を盡くしたる花の都のふるさとを、燒野の原と顧みて、末は煙の浪路をば、行方も知らずさすらふらん。直衣束帶の身にも、今は黑金の衣

都落（春日權現靈驗記繪詞）

を着けたれども、誰かは詠歎の餘哀になれて弓矢の響を勵むべき。さても捨てがたき命や。今こそは憂き世なれ。流石にしのばるゝ昔の樣の夢に入るをば如何にせん。翠華搖々として西にむかへば、秋風到るところの野に滿てり。嗚呼昨日は東關のもとに轡を並べて十萬餘騎、今日は西海の波に纜を解きて七千餘人。行手の空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず。渚に寄する波の音、袂に宿る月の影、何れか心を痛ましめざるべき。月の出づる山の端を、あなたの空とやおぼしけん、薄暮舳に笛吹く人あり、響は遠く煙波をかすめて、三軍ひとしく耳をそばだつ。嗚呼此の時此の人、想ひ果して如何。（樗牛全集）

清盛入道

世にも哀れなるは平家とぞいふめる。げに此の一門の盛衰を

笛吹く人
壽永二年十月平清經（重盛の三男）月夜に笛を弄し後入水した

考ふるに、心も詞も及び難きなり。

案ずれば、一旦の榮華に耽りて百年の計を思はず。今や秋の嵐の吹荒ばんずる朝も、春の夜の夢なほ朧ろにして覺めての後は流石にうき世と觀ずれども、先世後代既に梭をかへたるをいかにすべき。今を昔に反さんすべもかた絲のよりくづれたる世こそ、かへすがへすも是非なけれ。

されば風雅にかくれては、一題の遺詠に今生の本懷を終へ、恩愛にほだされては、色身の現在に來世の果報をおもはず。哀れは桐の一葉に散初めて、世はとこしへの秋とぞ見えにける。想へば怪しきまでに哀れなりける運命かな。

さるにても入道相國の生涯こそ、なかなかにおもしろかりけれ。弓矢のいさをしはや畢んぬ。朝家の權柄今はた盛りなり。一

一題の遺詠云々
平忠度の和歌を遺したこと

恩愛にほだされては云々
平維盛妻子の愛にひかされて屋島より都に上らうとしたが叶はず、熊野浦に投じて死んだ。

門殿上に昇りて六十餘人、私封全國にわたりて三十餘州、攝籙の家は名のみにて、四海の成敗みなこゝに集まれり。昔は殿上の交りをだに嫌はれし人、今は「此の人ならでは人にあらじ。」とうたはれ、三百の禿童は路に往反すれども、京師の長吏これが爲に目をそばだつるばかりなり。されば十善の帝王かしこくも外戚の威におされ給ひて、八幡賀茂の御幸は、八重の潮路の嚴島とぞ觸れられける。なにがしの卿が、「入る日をも招きかへさんずる勢。」と書かれしも、げにことわりとぞ覺ゆる。

不敵なる入道は、私門の榮に飽きたらで、世に、人もなげにふるまはれけるこそゆゝしけれ。こゝに卿相雲客、流離の難に遇ふもの四十餘人、法皇の御身を以てすら、城南の離宮に射山の嵐をしのばせ給ふ。中にも重代の帝座俄かに動きて、愛宕の里の哀れ

此の人ならでは云々
平大納言時忠の宣ひけるは、この一門にあらざらんものは皆人非人たるべし。（平家物語）

十善
不殺生・不偸盗・不邪淫・不妄語・不惡口・不兩舌・不綺語・不慳貪・不瞋恚・不邪見

射山
藐姑射山の略。支那にて神仙の棲む山といふ。こゝは仙洞御所のこと。

をとゞめけるこそなかなかにあさましかりしか。

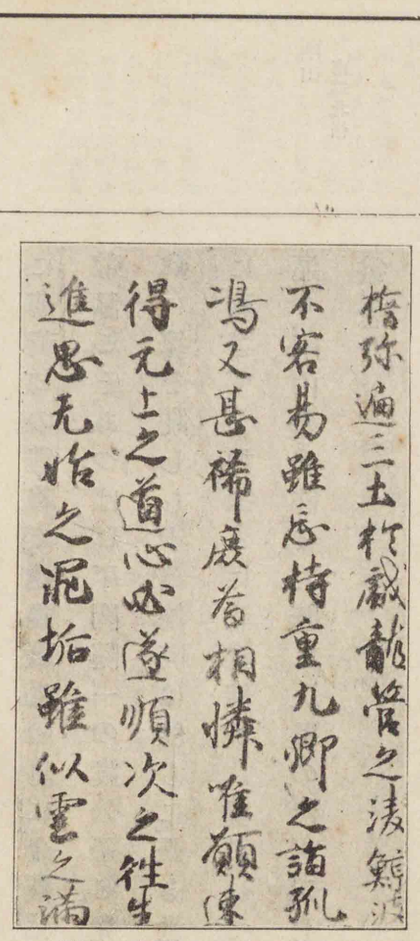
咲きも殘らず散りも初めぬ櫻花、嵐なくともかくてやはやむべき。一朝東關急を傳へて、大將軍權亮少將維盛、赤地の錦の直垂に萠黃匂の鎧着て、連錢蘆毛の馬に金覆輪の鞍置かせたる容儀帶佩こそ、あつぱれ平門隨一の貴公子と見えしかど、富士川の水禽に算を亂しし十萬餘騎は、徒らに長き世の笑ひをとゞめたるに過ぎず。加ふるに北土俄かに雲亂れて、木曾の山氣漸く都に逼り、兩山の衆徒また既に反覆の色を示しぬ。平家の運命日に益急なり。

時しも入道は病に罹りぬ。あはれ病の床の寂しきに、霜夜の鐘の響の闇の底に沈む時、安藝守の昔より太政入道の今に至る迄、三十餘年の過去を靜かに憶ひ出でたる時、しかして命の際の身

愛宕の里の哀れ
百年を四かへりまでに過き來にしおたぎの里のあれや果てなん（平家物語）

兩山
南郡北嶺

ぞと觀じたる時、果して如何の感慨をか催しけん。一代の榮華身に餘りて、保平のいさをまた言ふに足らずと思はざりしか。おのれにつらかりし人々を、かくまでに惱ましことの罪深かりきとは思はざりしか。幾度か帝座を驚かし奉りしは、軍兵を擁して法皇を幽閉しまゐらせし事の、中にも非道の所行なりしを思はざりしか。更に小松の内府が身命にかへて乃父の罪業を救はんとせし至孝の情に想ひ到りて、恩愛の絆にうたゝ悔恨の心を動かすこと無かりしか。佛門に歸依



平清盛自筆願文（嚴島神社藏）

六慾
眼・耳・鼻・舌・身・意の六根から起る慾

して入道と呼びなせる身の、今や六慾煩惱の絆を離れんずる大事の際に、今生の名利を棄てて、未來の淨樂を欣求する一念を發すること無かりしか。皆あらず。入道は死に至るまで其の初念を翻すことなく、まさに其の生けるが如くにして死せしなり。」今はの詞に曰はく、「兵衞佐頼朝が首を見ざりつるこそ、かへすがへすも遺憾なれ。われ死したりとて佛事孝養をもすべからず。堂塔をも建つべからず。いそぎ討手を下し、彼が首を刎ねて我が墓前に懸けよ。これぞわれに對しての今生後世の孝養にてはあらんずるぞと。一念の執着に必衰の運命を物ともせず、三世の因果を身にひくとも、なほ怨敵に報いんことを必せり。其の事の可否はしばらく措き、とまれかくまれ、丈夫たる心の强きは感ずべきなり。たとひ四海の波を翻して彼が頭にそゝぐとも、

なほ此の一我をいかにともすること能はざらん。六尺の眇軀こゝに到れば天地の大にもくらぶべく、運命われに於て浮塵にひとしからん。いはゆる死して而して生けるものといふべきか。（樗牛全集）

俊寛　京都法性寺の執行、藤原成親等と平家を滅さうとして、治承元年鬼界ケ島に流された。享年三十七

相國　太政大臣平清盛

中宮　高倉天皇の后建禮門院

一一　俊寛（謠曲）

シテ　俊寛　ツレ　成經　ツレ　康頼

ワキ　赦免の使者

ワキ「是は相國に仕へ申す者にて候。さても此の度中宮御産の御祈りの爲に、非常の大赦行はるゝにより、國々の流人赦免ある。中にも鬼界が島の流人の中、丹波少將成經・平判官康頼二人赦免の御使をば某承はつて候間、唯今鬼界が島へと急ぎ候。」

成經康頼「神を硫黄が島なれば、願ひもみつの山ならん。是は九州薩摩潟、鬼界が島の流人の中。」成經「丹波少將成經。」康頼「平判官入道康頼。」二人「二人が果てにて候なり。我等都に在りし時、熊野參詣三十三度の、歩みをなさんと立願せしに、その半ばにも數足らで、かゝる遠流の身となれば、所願も空しくはやなりぬ。せめての事の餘りにや、此の島に三熊野を勸請申し、都よりの道中の、九十九處の王子まで、悉く順禮の神路に幣を捧げつゝ、こゝとても同じ宮居と三熊野の浦の濱木綿一重なる、麻衣のしをるゝを、たゞそのまゝの白衣にて、眞砂をとりて散米に、白木綿花の御祓して、神に歩みをはこぶなり。」

シテ「後の世を、待たで鬼界が島守と、」地「なる身の果ての闇きより、」

シテ「闇き道にぞ入りにける。」シテ「玉兎晝眠る雲母の地、金雞夜宿す

九十九處の王子　京都熊野間に九十九所の遙拜所があつて一々熊野の神を祀つてある。之を王子の社といふ。

竹葉
酒の異名

彭祖
菊を服して壽を延べ七百歳に至つて猶顏容が十七八歳の樣であつたといふ。

不萌の枝。寒蟬枯木を抱きて、鳴盡くして頭をめぐらさず。俊寛が身の上に知られて候。」

康頼「あれなるは俊寛にてわたり候か。これまでは何の爲の御出にて候ぞ。」シテ「早くも御覽じ咎めたり。道迎へのそのために、酒を持ちて參りて候。」康頼「そも一酒とは竹葉の、この島にあるべきかと立ちより見れば、や、是は水なり。」シテ「これは仰せにて候へども、それ酒と申すことは、もとこれ藥の水なれば、醪酒にてなどなかるべき。」成經康頼「實に〳〵これは理なり。頃は長月。」シテ「時は重陽。」成經康頼「處は山路。」シテ「谷水の。」三人「彭祖が七百歳を經しも、心を汲み得し深谷の水。」地「飲むからに、實にも藥と菊水の、心の底も白衣の、ぬれてほす、山路の菊の露の間に、我も千年を經る心地する。配所はさてもいつまでぞ。春過ぎ夏闌けてまた、秋暮れ

法勝寺
山城國愛宕郡にあつた俊寛ほとゝの執行であつた

喜見城
帝釋天の居所といふ

涙川云々
涙川なに水上を尋ぬけん物思ふ時のわが身なりけり（古今集、讀人不知）

冬の來るをも、草木の色ぞ知らするや。あら戀しの昔や。思ひ出は何につけても、あはれ都にありし時は、法勝寺法成寺、たゞ喜見城の春の花。今はいつしか引きかへて、五衰滅色の秋なれや。落つる木の葉の盃、飲む酒は谷水の、流るゝもまた涙川、水上は我なるものを、物思ふ時しもは、今こそ限りなりけれ。」

ワキ「早船の、心にかなふ追風にて、舟子やいとゞ勇むらん。いかに此の島に流され人の御座候か。都より赦免狀を持ちて參りて候。急いで御拜見候へ。」シテ「あら有難や候。軈て康頼御覽候へ。」康頼「何々、中宮御產の御祈りの爲に、非常の大赦行はるゝにより、國々の流人赦免ある。中にも鬼界が島の流人の中、丹波少將成經平判官入道康頼二人赦免ある所なり。」シテ「何とて俊寛をば讀落し給ふぞ。」康頼「御名はあらばこそ。赦免狀の面を御覽候へ。」

シテ、赦免狀を見て、「さては筆者のあやまりか。」ワキ「いや、某都にて承はり候も、康頼成經二人は御伴申せ、俊寛一人をばこの島に殘し申せとの御事にて候。」

シテ「こはいかに罪も同じ罪、配所も同じ配所、非常も同じ大赦なるに、一人誓ひの網に漏れて、沈み果てなん事は如何に。この程は、三人一處にありつるだに、さも恐ろしく凄まじき、荒磯島に唯一人、離れて海士の捨草の、波の藻屑のよるべもなくて、あられんものかあさましや。歎くにかひも渚の千鳥、泣くばかりなる有樣かな。」

地「時を感じては、花も涙をそゝぎ、別れを恨みては、鳥も心を動かせり。もとよりもこの島は、鬼界が島と聞くなれば、鬼ある處にて、今生よりの冥途なり。たとひ如何なる鬼なりと、このあはれ

時を感じては云々
感レ時花濺レ涙、恨レ別鳥驚レ心。（杜甫の詩句）

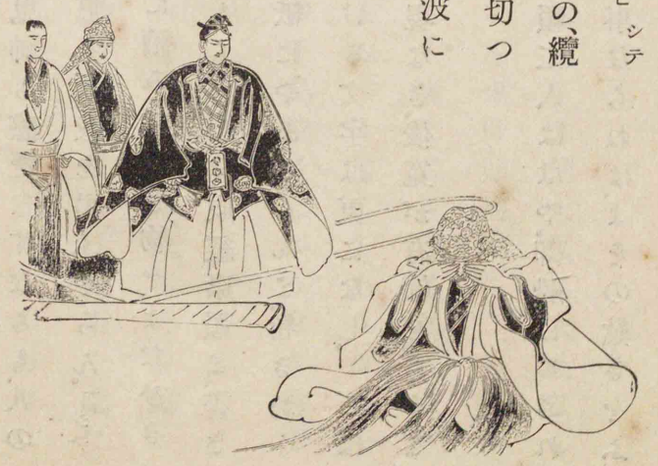
なごか知らざらん。天地を動かし、鬼神も感をなすなるも、人のあはれなるものを、この島の鳥獸も、鳴くは我を弔ふやらん。」シテ「せめて思ひのあまりにや、」地「さきに讀みたる卷物を、またひき開き同じあとを、繰返し〳〵、見れども〳〵たゞ、成經康頼と、書きたるその名ばかりなり。もしも禮紙にやあるらんと、卷きかへして見れども、僧都とも俊寛とも、書ける文字は更になし。こは夢かさても夢ならば、さめよ〳〵と現なき、俊寛が有樣を、見るこそあはれなりけれ。」

ワキ「時刻移りて叶ふまじ。成經康頼二人ははや、御船にめされ候へとよ。」成經康頼「かくてあるべき事ならねば、よその歎きをふりすてて、二人は船に乘らんとす。」シテ「僧都も船に乘らんとて、康頼の袂にとりつけば、」ワキ「僧都は船に叶ふまじと、さも荒けなく

天地を動かし云々
天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ（古今集序）

松浦佐用姫
その夫、大伴狹手彦の唐土に渡る船を見送り、別れを悲しんで石になつたと傳へられる。

言ひければ、」シテ「うたてやな、公の私といふ事のあれば、せめては向ひの地までなりとも、情に乘せてたび給へ。」ワキ「情も知らぬ船子ども、櫓櫂をふりあげ打たんとす。」シテ「さすが命の悲しさに、又立歸り出船の、纜に取附き引きとむる。」ワキ「舟人纜押切つて、船をふかみに押出す。」シテ「せん方波にゆられながら、たゞ手を合せて船よのう。」ワキ「船よといへど乘せざれば、」シテ「力及ばず俊寛は、」地「もとの渚にひれ伏して、松浦佐用姫も、我が身にはよもまさじと、聲も惜しまず泣きゐたり。



藤岡作太郎
號は東圃
金澤市の人
國文學者
文學博士
東京帝國大學助教授
明治四十三年歿
年四十一

ワキ成經康頼の三人「痛はしの御事や、我等都に上りなば、よき樣に申し直しつゝ、やがて歸洛はあるべし。御心づよく待ち給へ。」シテ「歸洛を待てよとの、呼ばゝる聲もかすかなる、たのみを松蔭に、音を泣きさして聞きゐたり。」三人「聞くや如何にと夕波の、皆聲々に俊寛を、」シテ「申し直さばほどもなく、」三人「必ず歸洛あるべしや、」シテ「それは眞か。」三人「なか〳〵に。」シテ「賴むぞよ。賴もしくて、」地「待てよ〳〵といふ聲も姿も、次第に遠ざかる沖つ波の、かすかなる聲絶えて、船影も人影も、消えて見えずなりにけり。あと消えて見えずなりにけり。」

一二　鎌倉室町時代の文學

藤岡作太郎

源頼朝幕府を鎌倉に開きて、政體こゝに一變す。公卿は政權を

失ふと共に意氣沮喪し、武人は兵事に勵めども文事に疎く、庶民は數度の戰亂に疲勞し困憊して生活に餘裕なし。從つて當代の文學に雄篇傑作の多からざりしは、亦已むを得ざる所なり。

當時專ら武家の祐筆となり參謀となりて文筆に從事したる者は僧侶にして、純文學の如きも多くは其の手に成れり。されば此の時代の文學に佛教的傾向の存すること平安朝より甚だしく、到るところに無常輪廻の思想を見るは、一は僧侶の手に成れるがため、一は時勢の然らしめし所にして、實に當時の頻繁なる變亂は社會をして自ら厭世に傾かしめ、盛者必衰會者定離の觀念の深く人心の根柢に染みたること、また舊時の比にあらざりしを思ふべし。

漢學は漸く衰へ、上流の人も多くは純粹なる漢文を書き得ず、こ

鴨長明
初め後鳥羽上皇に召されて和歌所の寄人となつたが、後出家して蓮胤といひ、又日野山に閑居した。建保四年寂年六十三

こに和漢混淆の一種特別なる文體を生ぜり。この文體を以て記したるものにして最初に成功したるは、蓋し方丈記なるべし。方丈記は鴨長明が源平の紛爭たえまなき世を厭ひて、山城の日野に隱棲せることを記せる短篇にして、文辭の流暢を以て顯はる。

更に和漢混淆體の大いに光彩を放ちたるは、源平爭鬪の次第顛末を記したる軍記類なり。抑源平二氏が盛衰の迅速なるや、これを見聞するものをして、自ら一種悲壯の感に打たれざるを得ざらしむ。こゝに於てか軍記の作あり。その最初に出でたるものは、保元平治の兩物語にして、ともに簡勁を以て勝れたり。ついで出でたる平家物語は、蓋し曲節を附して諷誦せんが爲に作られしものなるべく、縱に雄大悲壯なる戰記を以て貫き、横に

哀憐優雅なる物語を錯綜して、其の間にまた幽玄奥妙の佛教趣味を點綴す。されば治承の春を名殘に壽永の秋を西國さして落ちゆける、夢よりもはかなき平家一門が榮枯盛衰の記述には、言々涙あり、句々同情あり、讀む人をして讀誦一過、忽ち無常厭世の感を懷いて佛道に歸入せしめずんばやまざらんとす。その冒頭を、「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現はす。」といふに起して、最後の卷には、建禮門院が後白河法皇への物語に、經過せる一生を六道に譬へたまへりといふに考へても、以て其の全豹を推すに足るべし。源平盛衰記は平家物語に比して、その記事更に詳密なり。文章頗る華麗にして、漢語を交ふること平家より遙かに多し。太平記は平家物語に倣ひて作れるものにして、後醍醐天皇の御卽位に筆を

建禮門院
高倉天皇の皇后
德子、淸盛の女。

起し、爾後五十年間の戰亂の始末を記述す。中興の事業に多大の同情と尊敬とを捧げ、數多の忠孝節義の士の事蹟を點綴して、其の間に倫理的宗教的觀念を鼓吹せるを見る。文體は漢字を用ふること更に著しく、文脈亦漢文調を加へたり。

是等のものと稍其の趣を異にし、率直平易なる文體にて書ける散文に、十訓抄・古今著聞集・宇治拾遺物語あり。何れも古來の面白く珍しき事實を輯めたり。

徒然草は兼好法師の作にして、その趣味を談じ、世態人情を說く間に、著者が修得せる道佛主義の眼鏡によりて、よく皮相の虛飾を透して隱れたる社會の裏面を洞察し、爬羅剔抉、痛快にそが矛盾撞着のあるところを暴露せり。文章も亦暢達にして雅馴、交ふるに奇句警語の天外より落來るものを以てし、かの枕草子と

兼好法師
姓は吉田
歌人
後宇多院に仕へたが、院の崩御の後出家し山水に遊んだ。
正平五年歿
年六十八

道佛
道は老子莊子の道、佛は佛敎。

併せて世に隨筆の雙絶と稱せらる。

此の外、歴史としては神皇正統記・增鏡等最も見るべし。神皇正統記は准后北畠親房の著にして、建武中興の業破れて王道の衰頽せるを慨憤し、古の歴史に照らして皇統の正閏を論じ、三種の神器の在るところ、卽ち名分の存するところなるを疾呼せるものなり。これ實に國文を以て綴れる議論文の權輿ともいふべく、婉曲なる字句のうちに博大なる氣格を藏して、堂々としてまた朗々たり。增鏡は後鳥羽天皇御卽位の始めより後醍醐天皇の隱岐より還幸せられしまで、凡そ百五十年間の事蹟を記述せり。記事客觀的にして、毫も著者の主張を交へず。文章また流麗なり。

和歌は其の初期に於て最も盛にして、元久二年には後鳥羽上皇の勅により、藤原家隆等新古今和歌集を撰せり。延喜以降和歌の勅撰實に八度に及びしが、就中古今と新古今と殊に勝れたり。新古今は其の名の示す如く、よく古今を改造し、加ふるに客觀的敍景の新調を以てし、別途に比較的圓滿なる發達を遂げしものといふべく、句調流麗、その新奇なること前古無比と稱せらる。從つて當時有名なる歌人亦少なからず。まづ俊成あり、西行あり、寂蓮あり。關白良經は天授の才を以て時流の歌を詠じ、將軍實朝は萬葉の古調を喜びて金槐集を作る。定家は俊成の子にして、家隆と共に名匠の譽一世に高く、前者が措辭の巧緻を喜べば、後者は最も暢達の調を尙べり。

室町幕府の世になりては、戰亂相繼ぎて干戈相見えざる日とてはなし。一時小康を見たる義滿の代の如き、實は大風到らんと

永享 永享十年足利持氏が亂をなした
嘉吉 嘉吉元年赤松滿祐が足利義教を殺した

して暫く平穩を持する時の如きのみ。永享に嘉吉に、一波は一波より甚だしく、應仁の亂に及びては遂に急潮突破して風伯叫び、電將狂ひ、雷神轟く大混亂、京都を中心として天下をこの混沌溟濛の裡に漂はすこと前後百餘年、上下擧つてその堵に安んずることを得ず、怨嗟の聲うたゝ四方に滿ちぬ。艶麗なる百花は平和なる春にこそ咲誇れ、かくすさまじき亂離の秋にいかでか榮えん。されば文學の如き全く度外に置かれて、毫も發達すべき餘裕を存せざりしなり。

されど應仁の亂までは、流石に幕威尙地に落ちず。殊に將軍義滿は柔弱にして遊樂を好み、義政は戰亂に遭へりと雖も社會の辛酸を知らざるが如く、それ〴〵閑居を設けて文雅風流を樂しめり。されば水墨の畫、香茶の技などの發達せしもこの時にして、能樂の勃興に伴なひて當代唯一の文學たる謠曲を生じたるも、實に此の時代なりとす。

謠曲は蓋し當時の僧侶の手になりしもの多かるべく、その中多く佛教の思想を含む。趣向は幽靈顯はれて往事を語り、巡錫の途なる名僧知識の回向によりて成佛するもの多數を占む。詞句は好んで古文辭を補綴すれども、皆よく諧和して珠を轉ずる如き好調に富む。

能樂の餘興に狂言といふものあり。その技、能樂の嚴正なるに對して滑稽を旨とし、概して罪もなき失策談にて、中にも迂愚なる大名を主人公とせるもの多く、巧に人情の弱點を捕へて誇張過大の脚色、よく人の頤を解かしむるものあり。その文は當時の言語をその儘に寫せるものにして、率直愛すべし。

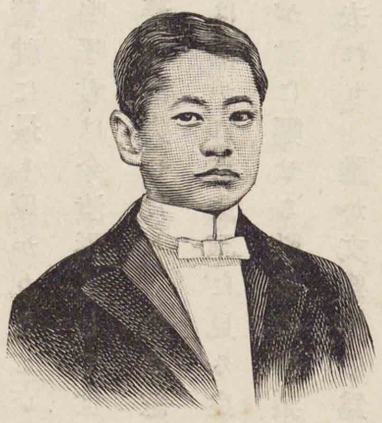
之を要するに、この時代は多少特色ある文學を產せざりしにはあらざれども、上に平安朝を承けてその後殿たり、下に江戸時代を起すべき先驅たり。まづは兩盛時を繫ぐ連鎖たる時代と謂ふべし。

一三　嗚呼藤岡博士

芳賀矢一
慶應三年福井市生
國文學者
文學博士
東京帝國大學名譽教授
國學院大學長

文學博士藤岡作太郎先生逝けり。嗚呼我が友藤岡東圃君逝けり。我が知友中、蒲柳多病なる君の如きは無く、篤學勵精なる君の如きも亦尠なし。君の宿痾は君の幼時始めて學に就くの齡に發し、爾來一日として君の體軀を惱まさざるは無かりき。然れども君の頭腦は毫も之が爲に屈服せられず、却りて異常非凡の發達を爲したりき。余は今より二十年以前、大學生として始

めて君と相識り、後大學教官として共に國文學の授業を擔當せること茲に十年に及べり。常に君が體力の虛弱なるに似ず精神力の旺盛なるに驚嘆し、深淵なる君の學殖と、超邁なる君の識見とに推服し、君の國文科に在るを以て、竊かに我が國文科の誇りなりと思惟せり。況んや君の蘊蓄は、其の專攻の國文學に於て無盡藏なるのみならず、美術史に於ける造詣と卓越せる美術批評眼とは、世亦已に定評あるをや。君の著書は、大學在學中に起稿せし日本風俗史を始めとして、近世繪畫史・國文學全史・平安朝篇・國文學史講話・松雲公小傳の如き、いづれも材料充實し、結構整頓せ



藤岡東圃

松雲公
加賀藩主前田綱紀
松雲は號
學識深く良政治を行つた
正德九年歿
年八十二

るのみならず、文辭流麗殆ど人を魅する力あり。一として千載に傳ふべき名著にあらざるなし。日常湯藥に親しめる君にしてかくの如き大著あり。天の君に與ふる、體軀に甚だ薄うして精神に最も厚かりきといはんか。

嗚呼君は今溘焉として世を捐てたり。我が國文學科の光明は驀地消失せたり。余は忽ち二十年來の益友に離れ、我が國文科は俄かに百歲罕に見る良師を喪ひたり。四十年の短生涯、世人が君に囑せる數多の事業を完了せずして君は明治の文壇を棄去れり。誰か文學界の爲に悲しみ、美術界の爲に惜しみ、國家の爲に一大損失を感ぜざらんや。

回顧すれば今より數年前、京都大學は君を聘して國文學の教授たらしめんとせり。然れども君は辭して就かず、ひたすらに江

戸時代文學の研究に心を委ね、助教授の卑きに甘んじて、孜々として今日に至れり。研究ほゞ其の緒に就き、國文學全史未だ全く成らざるに際り、空しく宿志を齎して泉路に就く。其の憾み如何許りぞや。加ふるに家に儋石の儲なく、堂に垂白の親あり。孩兒三兒の哺養一に未亡人の手に在るを思へば、誰か哀悼痛惜の情に禁へんや。

然れども君の一生は、初めより身體の生活に非ずして精神の生活たりしなり。もとより俸祿の爲に生きず、名譽の爲に生きず、ひたへに學問の爲に生きたりしなり。而して遂に學問の爲に殉ぜしなり。焉んぞ知らん、天は暫く君の病軀に四十年の世壽を假して、人の精神の如何に肉體に超越せしかを示せしに非ざるかを。君は逝けども世に布ける君の著書は、永く我が國文學

の光明として學界を照鑑せり。君の溫容は復大學の教壇に見るべからず、君の才筆は再び明治の文壇を飾らざれども、我が國文科の學士學生は深く君の學德を慕ひ、君の事業を繼ぎ、皆爭うて東圃先生の宿志を成さんとす。嗚呼我が友東圃君はもとより不朽なり。藤岡博士は決して死するの時なかるべきなり。

尙はくは饗けよ。

一四 熊野落

太平記

大塔宮二品親王は笠置の城の安否を聞し召されん爲に、暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城既に落ちて、主上囚はれさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐れ御身の上に薄りて、大地廣しと雖も御身を隱さるべきところなく、日月明ら

大塔宮
護良親王
般若寺
奈良市奈良坂にある

一乘院
奈良興福寺の內にあつた

護良親王（持田陽延筆）

かなりと雖も長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隱れて露に臥す鶉の床に御涙を爭ひ、夜は孤村の辻に佇みて人を咎むる里の犬に御心を惱まされ、何處にても御心安かるべき處なかりければ、かくても暫時はと思召されける所に、一乘院の候人按察法眼好專、如何して聞出したりけん、五百餘騎を率ゐて未

大般若經六百卷唐の玄奘三藏の譯したもの

明に般若寺へぞ寄せたりける。折節宮に附き奉りたる人、一人もなかりければ、一防ぎ防ぎて落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、透間もなく、兵既に寺内にうち入りければ、紛れて御出であるべきかたもなし。さらばよし自殺せんと思召して、既にお し膚脱がせ給ひたりけるが、事協はざらん期に臨みて腹を切らんことはいと易かるべし。もしやと隱れて見ばやと思召しかへして、佛殿の方を御覽ずるに、人の讀みかけておきたる大般若の唐櫃三つあり。二つの櫃は未だ蓋を開けず。一つの櫃は御經を半ば過ぎ取出して、蓋をもせざりけり。この蓋を開けたる櫃の中に御身を縮めて伏させ給ひ、其の上に御經を引きかづきて、隱形の咒を御心の中に唱へてぞおはしける。もし搜し出されなば、やがて突立てんと思召して、氷のごとくなる刀を抜きて、

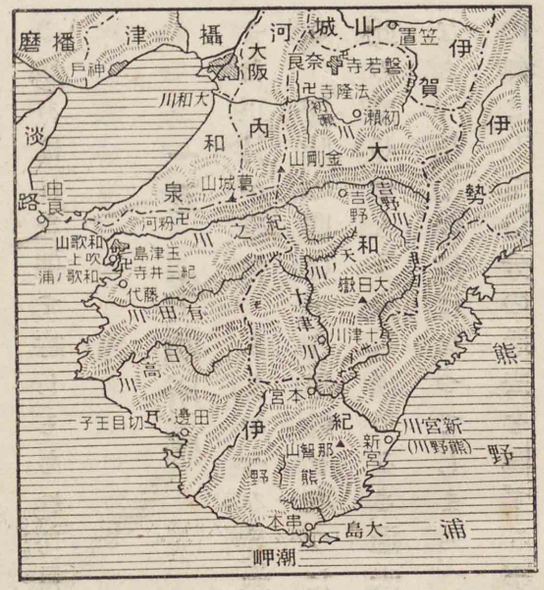
御腹にさし當て、兵「こゝにこそ。」といはんずる一言を待たせ給ひける御心の中、推量るもなほ淺かるべし。さる程に、兵佛殿に亂れ入りて、佛壇の下天井の上までも、殘る處なく搜しけるが、餘りに求めかねて、「これ體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃を開けて見よ。」とて、蓋したる櫃二つを開けて御經を取出し、底を飜して見けれどもおはせず。蓋開きたる櫃は見る迄もなしとて、兵皆寺中を出で去りぬ。宮は不思議の御命をつながせ給ひ、夢に道行く心地して、なほ櫃の中におはしけるが、もしまた兵立ちかへり、委しく搜す事もやあらんずらんと御思案ありて、やがて前に兵の搜し見たりつる櫃に入り替はらせ給ひてぞおはしける。案の如く兵どもまた佛殿に立ちかへり、前の蓋の開きたるを見ざりつるが覺束なしとて、御經を皆うち移して見けるが、からか

玄奘三藏
河南洛陽の人十三年を費して、印度に經を求め、太宗の勅により大般若經を譯した。

摩利支天
帝釋天の眷族で古來軍神として崇められた

十六善神
十六の佛法守護の善神

らとうち笑ひて、「大般若の蓋の中をよく〳〵搜したれば、大塔宮はいらせ給はで、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ。」と戯れければ、兵皆一同に笑ひて門外へぞ出でにける。「これ偏に摩利支天の冥應、又は十六善神の擁護にかゝれる命なり。」と信心御肝に銘じ、感涙御袖を濕ほせり。　かくては南都邊の御隱家も協ひ難ければ、乃ち般若寺を御出でありて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御伴の衆には、光林坊玄尊・赤松律師則祐・木寺相模・岡本三河坊・武藏坊・村上彦四郎・片岡八郎・矢田彦七・平賀三郎、彼此以上九人なり。宮を始め奉りて御伴の者までも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾・眉半ばにせめ、その中に年長ぜるを先達に作り立て、田舍山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。　この君元より龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、



御歩行の長途は定めて協はせ給はじと、御伴の人々豫て心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮・脚巾・草鞋を召して、少しも草臥れたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤め懈らせ給はざりければ、路次に行遭ひける道者も勤修を積める先達も見咎むる事なかりけり。　由良の湊を見渡せば、澳漕ぐ船の楫をたえ、浦の濱ゆふ幾重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺々と、薄紫や藤代の、松にかゝれる磯の浪、和歌・吹上をよそ

雨を含める云々
孤村樹色昏ニ殘雨一遠寺鐘聲帶ニ夕陽一（唐の盧綸の詩句）

夏目漱石
名は金之助
江戸の人
英文學者
小説家
大正五年歿
年五十

に見て、月に瑩ける玉津島、光も今はさらでだに長汀曲浦の旅の路、心を碎く習ひなるに、雨を含める孤村の樹、夕べをおくる遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目の王子に着き給ふ。

一五　年頭所感

夏目漱石

また正月が來た。ふりかへると、過去がまるで夢のやうに見える。何時の間にかう年齢を取つたものかと不思議な位である。此の感じをもう少し強めると、過去は夢としてさへ存在しなくなる。全くの無になつてしまふ。實際此の頃の私は、時々たゞの無として自分の過去を觀ずる事がしば〳〵ある。いつぞや上野へ展覽會を見に行つた時、公園の森の下を歩きながら、自分は或目的をもつて先刻から足を運ばせてゐるにも拘らず、未だ

曾て一寸も動いてゐないのだと考へたりした。是は耄碌の結果ではない。宅を出て、電車に乘つて、山下で降りて、それから靴で大地の上をしかと踏んだといふ記憶を確かに有つた上の感じなのである。自分は其の時、終日行いて未だ曾て行かずといふ句が何處かにあるやうな氣がした。さうして其の句の意味は、かういふ心持を表現したのではなからうかとさへ思つた。」これをもつとむづかしい哲學的な言葉でいふと、畢竟過去は一の假象に過ぎないといふ事にもなる。金剛經にある、過去心は不可得なりといふ意義にも通ずるかも知れない。さうして當來の念々は、悉く刹那の現在からすぐ過去に流れ込むものであるから、又瞬刻の現在から、何等の段落なしに未來を生出すものであるから、過去に就いて言ひ得べきことは、現在に就いても言

ひ得べき道理であり、また未來に就いても下し得べき理窟であるとすると、一生は終に夢よりも不確實なものになつてしまはなければならない。かういふ見地から「我」といふものを解釋したら、いくら正月が來ても、自分は決して齡を取る筈がないのである。齡を取るやうに見えるのは、全く暦と鏡との仕業で、其の暦も鏡も、實は無に等しいのである。

驚くべきことは、これと同時に現在の「我」が、天地を蔽ひ盡くして儼存してゐるといふ確實な事實である。一擧手一投足の末に至るまで、「我」が認識しつゝ、絶えず過去へ繰越してゐるといふ動かしがたい眞境である。だから其處に眼を着けて自分の後を振返ると、過去は夢どころではない。炳乎としてあきらかに刻下の「我」を照らしつゝある探照燈のやうなものである。從つて

正月が來るたびに、自分はやはり世間並に齡を取つて、老い朽ちて行かなければならなくなる。

生活に對する此の二つの見方が、同時にしかも矛盾なしに兩存して、普通にいふ所の論理を超越してゐる異樣な現象について、自分は今何も説明するつもりはない。又解剖する手腕も有たない。たゞ年頭に際して、自分は此の一體二樣の見解を抱いて、わが全生活を大正五年の潮流に任せる覺悟をしたまでである。」若し「無」に卽していへば、自分は此のたびの春を迎へる必要も何もない。否、明治の初めから生れないのと同じやうなものである。然し「有」になづんでいへば、多病な身體が又一年生延びるにつけて、自分の爲すべき事は、それだけ量に於て增すのみならず、質に於ても幾分か改良されないとも限らない。從つて、天が自

分に又一年の壽を借してくれた事は、平常から時間の缺乏を感じてゐる自分に取つては、どの位の幸福になるか分らない。自分は出來るだけ、餘命のあらん限りを最善に利用したいと心掛けてゐる。

夏目漱石筆

趙州和尚といふ有名な唐の坊さんは、趙州古佛晩年發心と人にいはれただけあつて、六十一になつてから始めて道に志した奇特な心がけの人である。七歳の兒童なりとも、我に勝るものには我卽ち彼に問はん、百歳の老翁なりとも、我に及ばざる者には

我卽ち彼を教へんといつて、南泉といふ禪坊さんの所へ行つて、二十年間倦まずに修業を繼續したのだから、卒業した時にはもう八十になつてしまつたのである。それから趙州の觀世音に移つて、始めて人を得度し出した。さうして百二十の高齡に至るまで化導を專らにした。

壽命は自分のきめるものでないから、固より豫測は出來ない。自分は多病だけれども、趙州の初發心の時よりもまだ十年も若い。たとひ百二十まで生きないにしても、力の續く間努力すれば、まだ少しは何か出來るやうに思ふ。それで私は天壽の許す限り、趙州の顰にならつて奮勵する心組である。古佛といはれた人の眞似も長命も、無論自分の分でないかも知れないけれども、羸弱なら羸弱なりに、現にわが眼前に展開する月日に對して、

あらゆる意味に於ての感謝の意を致して、自己の天分の有りたけを盡くさうと思ふのである。（漱石全集）

一六　物の初め

幸田露伴

幸田露伴
名は成行
慶應三年江戸生
文學者
小説家
文學博士

よろづのもの、初めこそは美はしく面白けれ。混沌わづかに剖かれて天地漸く成りし時は、如何ばかり目ざましう快かりけん。それは見ねば知らず。まづ年の首の朝ぼらけ、大路に箒目の痕清くして、千門に旗の日の紅飜るすがすがしさ。行きかふ人々の面の色も若々しう、悔恨を昨夜の關の彼方に捨てて、希望を此の曉の風の息吹に蘇らせ、今歳はと勇める眼の中の勢もこのもしや。

雲の扉裂けて金光迸り騰り、紅盤焔旋りて瑪瑙爛るゝ太陽のさし昇りたる、日の出づる初めの景色は、春といはず冬といはず爽やかなり。

樹影沈んで夕べの水潤く、暮靄地に這ひて人の語靜まる時、白玉潤ほひを含んで大いなること車輪の如き月の、薄縹の天にそつと出でたる、其の初めの涼しき心地は、之を何にか喩へん。

潮の初めも亦面白し。濱の沙固うして礫やゝ乾き、汐木小白み て寄藻香を放つ干潮の極みに、沖の方漸く膨れて、さし潮の風に乘り來り、一分一分に沙を蝕ひ、礫を呑み、潮泡渚に搖ぎて豆蟹勇み奔り、海鷗天に舞ひて時に濤の頭に下り、寄藻汐木のぬれ〳〵て動かんとする折、邊波にまろぶ貝殼も艷やかに、磯石未だものいはず、濤猶怒らねど、やがては澎湃韜韜の響震天撼地の勢をなして、龍王が無字の大經卷を卷いて、又舒べて、千古萬古人間に其

の讀まんことを逼る日々の凄まじき業を繰返さんとする意を示せる、何ともいへず壯なる狀含まる。

天に挺んでては白雲を駐め、日を蔽うては山逕を青むる喬樹の、其の初め、杉も檜もひよろ〳〵として、松も欅もなよやかなるをかしさ。雨の膏には怡悅の目を張りて笑み、風の笞には悲哀の聲を潤ませて戰けど、其の中に不屈の意氣を保ちて、雪虐ぐれども偃して復起き、霜辱むれども萎けて再び振ひ、日の父の光を慕ふ孝子の情誠に、月の母の露に甘ゆる少女の思ひ優しく、上に向ひ上に向ひ、自ら貞しうし自ら貞しうして、終に其の生を遂げんとする勢ある、孔孟出でざるも道こゝに啓かれたりといふべし。」

菽の初め、菘の初め、かはゆき甲拆の姿のしをらしや。地壓すれば芽ざさんとして芽ざし難きまゝ伸びんとして屯まり、身を屈

嶰竹
嶰は崑崙山の北にある谷の名
黃帝が冷倫に命じて嶰谷の竹を取つて十二律管を作らした

めて一力入れ、根入り漸く足りて辛うじて世に出でたる、嫩青微綠柔らかにして夢を結べる如き、さはらば消えんおぼつかなさの二葉に籠れる力こそめでたけれ。

禽の初めの卵殼の中にありてひゝと鳴きたる啐啄事了りて綿毛に風の當りたる、皆あはれに勇まし。彼の聲には嶰竹裂けんとし、石破れんとする韻を藏し、此の姿には鐵翮颶を截りて崑崙を凌ぐ威を具ふ。魚は苗にして江湖に遊ばんとし、蛇は寸にして藪澤に傲る。仔駒の生れて眼の色だに定かならぬに、四蹄早くも輕く草の煙を蹴て母馬に追ひつき其の乳を立飲みしたる、あどなくして而も至健の德を現はす。獅子の兒の怒毛もまだ硬からぬに、千尺の崖より墜されて巉巖の下に膽を張り爪を張りたる、流石に仰いで親の姿の霞に遠きを見ては、兒心の遣る瀨

なき思ひもすらんを、獣王の血統とて女々しからぬも尊し。よろづのものを觀るに、其の初めみな美はしく好し。人の子の生るゝや、悪相なしと聞く。物みな始め有り、願ふところは其の始め有る所以を遂げんことなるのみ。（洗心錄）

方丈記
鴨長明著

一七　行く川の流れ

方丈記

行く川の流れはたえずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまることなし。世の中にある人と住家と、亦かくの如し。玉敷の都の中に棟を並べ甍を爭へる尊き卑しき人の住居は、代々を經て盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり、或は去年破れて今年は造り、あるは大家亡びて小家となる。

住む人もこれに同じ。處もかはらず人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に僅かに一人二人なり。朝に死し、夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人何方より來りて何方へか去る。また知らず、假の宿り誰が爲に心を惱ましし何によりてか目を悅ばしむる。その主人と住家と無常を爭ひ去るさま、いはば朝顏の露に異ならず。或は露おちて花殘れり、殘るといへども朝日に枯れぬ。或は花は萎みて露なほ消えず、消えずといへども夕べを待つことなし。凡そ物の心を知りしより以來、四十あまりの春秋を送れるあひし。

鴨長明

安元三年
高倉天皇の御代
其の八月に治承
と改元

だに、世の不思議を見ることやゝ度々になりぬ。いにし安元三年四月二十八日かとよ、風烈しく吹きて靜かならざりし夜、戌の時ばかり、都の巽より火出で來りて乾に至る。ゝはてには朱雀門大極殿・大學寮・民部省まで移りて、一夜が程に塵灰となりにき。火元は樋口富小路とかや、病人を宿せる假屋より出で來けりとなむ。吹迷ふ風に、とかく移り行くほどに、扇をひろげたるが如く末廣になりぬ。遠き家は煙にむせび、近き邊りはひたすら焔を地に吹きつけたり。空には灰を吹きたてたれば、火の光に映りて普く紅なる中に、風に堪へず吹切られたる焔飛ぶがごとくにして、一二町を越えつゝ移り行く。その中の人うつゝ心あらむや。或は煙にむせびて斃れ伏し、或は焔にまぐれて忽ちに死にぬ。或は又纔かに身一つ辛くして遁れたれども、資財を取出

づるに及ばず。七珍萬寶さながら灰燼となりにき。その費えいくそばくぞ。此の度公卿の家十六燒けたり。ましてその外は數を知らず。すべて都の中三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人、馬牛のたぐひ邊際を知らず。人の營み皆愚かなる中に、さしも危き京中の家を作るとて、寶を費し、心を惱ます事は、勝れてあぢきなくぞ侍るべき。

また治承四年卯月二十九日の頃、中御門京極のほどより大いなる旋風起りて、六條わたりまで嚴めしく吹きける事侍りき。三四町をかけて吹きまくるに、その中に籠れる家ども、大きなるも小さきも、一つとして破れざるはなし。さながら平に倒れたるもあり、桁柱ばかり殘れるもあり、又門の上を吹放ちて四五町が外に置き、又垣を吹拂ひて隣と一つになせり。況んや家の内の

寶、數を盡くして空にあがり、檜皮葺板のたぐひ、冬の木の葉の風に亂るゝが如し。塵を煙の如くに吹きたてたれば、すべて目も見えず。夥しく鳴りどよむ音に、物いふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりとも、かばかりはとぞ覺ゆる。家の損亡せるのみならず、これを取繕ふ間に身を害ひて、かたはづけるもの數を知らず。この風、坤の方に移り行きて、多くの人の歎きをなせり。「旋風は常に吹くものなれど、かゝることやはある。たゞごとにあらず。さるべき物のさとしかな。」とぞ疑ひ侍りし。

一八　日本趣味

佐々政一

佐々政一
號は醒雪
京都の人
國文學者
文學博士
東京高等師範學校教授
大正六年歿
年四十六

日本人が淡き趣味を愛するのは、その天賦であらう。淡いとは刺激の少ない單純なものの義で、例へば西洋料理とか支那料理とかの脂濃いものは、由來日本人の嗜好に遠い。咽せかへるやうなバイオレットの薫りよりは、幽かな薫香の覺束なきを好む。芳烈な薔薇の香は賤しまれて、有るか無きかの梅が香は如くものなしと稱へられる。從つてこれを器物に見ても、西洋風の煖爐といへば必ず凸凹や六角の煩はしい飾りがあるが、日本風の桐火桶は極めて單純な丸形で、胴のあたりが少し張出してゐるといふに過ぎぬ。食物を口に運ぶ道具にしても、彼の一々込入つた彫刻などの有るものに比すれば實に同日の論ではない。その茶匙にしても、日本の茶席に用ひるものは、竹の篦の一端を曲げてざつと削つただけのもので、よしや贅澤な象牙製のものであつても、これに彫刻なぞを施すことは、日本趣味の許さぬ所である。かゝる傾向は、武家主義の質朴な文化に因り、或は禪宗

源氏物語　五十四帖、紫式部の作つた平安朝時代の小説。
攝政太政大臣家　二條大臣家　源氏物語の中の權力ある朝臣の家
枕草子　紫式部と同時代の清少納言が書いた隨筆

の端的な教義に由つて、益〻培養せられ來つたものである事は、敢へて疑ふべきではないが、その素因は已に平安朝に存してゐる。かの源氏物語に、攝政太政大臣家と二條大臣家とを比較して、前者のたゞ何となく由ありげに奥ゆかしい有樣と、後者の今樣風にきらびやかなる物のみをいやが上に列べられたことを敍して、一も二もなく二條家を無趣味なりと斥けてゐる事や、或は枕草子に梨の花をほめて、よく〳〵見ればその花瓣の一隅に覺束なき幽かなる色がついてゐるのが面白いといつた事などを思ひ比べても、或は歌人等が霜に惱んだ菊の花を面白く移ろうたと稱へて、その紅紫爛漫たる眞盛りを却つて等閑にしてゐることなどを見ても、所謂「こちたく、けざやかなる」ものは、その好む所でなかつた事が極めて明らかである。

櫛形の窓　清涼殿のうちにある窓

徒然草はや〻後のものであるが、その著者は實に平安朝趣味の渇仰者で、田舍者に依りて始められようとした新しい趣味に對して極力反抗した人である。その古風なものが、物ごとに「やすくすなほ」であつたのを慕つて今樣の複雜な絢爛なものを排斥してゐるのは、最も著名な事である。かの内裏の櫛形の窓が、昔は木の縁もとらず唯圓く穴を穿つたのみであつたのに、新造營の時に、その窓に過つて縁をとるのみならず、その形が少し複雜なものになつてゐたので、故實家がこ

れを見つけて改造させたといふ事を、さも重大な手柄のやうに記してゐる所を見ても、如何に單純なものを愛したかといふ事が容易く想像されよう。

古の人は烈しい刺激を忌んで、幽かな淡い趣味を樂しんだ。かの武陵桃源にも比すべき平安朝の長閑けき都をすら、動もすれば尙刺激に堪へずとして、太古のまゝの深山に隱れた者もある。都鄙漸く戰亂の塵に汚さるれば、乃ち四疊半の茶室に立て籠つて、此處に塵外の閑寂を味はゝうとした。茶器も膳部も目をひく色香を避けて、床の間には淡彩の小幅をかける。若し一輪の花を生けようとすれば、かの小幅をさへ取去つて、花のみの床にしたいといふのは實に周到な用意である。曾て千利休の草庵に朝顏の咲きそろつた頃、豐公はその眞盛りを見ることを約し

武陵桃源 支那の傳說の仙鄉 晉の陶淵明に桃花源記がある

千利休 織田豐臣二氏の時代に出た茶湯の大家

て、拂曉その茶室を訪うた。すると利休は悉く庭先の朝顏を拂ひ捨てて、唯一輪床の間に挿して置いたといふ事である。蓋し紅紫妍を競ひ艶を爭ふが如きは、最もその趣味に遠いのである。この趣を解し得ない者は、思ふに日本の文藝を解する資格のない者である。

三十一文字の和歌、十七字の發句は、この一輪の朝顏である。その五音七音の外に何等の珍奇な複雜な形式をも求めないのは、單純な桐火桶に似てゐる。更にその趣味の淡々として人の耳目を聳動するものの無いのは、かの薔薇の香を賤しむ心から來たものである。思ふに一輪の朝顏よりも朝顏人形の花々しきを好み、桐火桶よりも飾付きの煖爐を好むのは、特別の修養なき人の狀態である。殊に薔薇の香水は、如何なる人の鼻にも感ぜ

られるが、薫香の幽かなるは、香道に入るに非ざれば知りがたいのである。

こゝに於てか日本の所謂高尚な趣味は、これを西洋趣味に比しては普遍性を缺いて、特別なる修養のある人の間にのみ味はゝれるといふ傾向を生じた。例へば、今日普通の教育を受けた青年に、始めて脂濃い西洋料理を味はゝせてみると、最初はその淡白ならぬを厭ふかも知れぬが、これに慣れる事は頗る早いに拘らず、會席料理の妙味を解せしむる事は容易の業ではない。況んや朝顔人形の美しい事は生れながらにして知つてゐるが、一輪の投込みに趣味を感ぜしむるには、多大の修養を經なければならぬ。

日本人は本來、淡白なものを好む傾向を有つてゐた。併しこの

傾向を基礎として漸次に涵養せられて來た、極めて淡い極めて幽かな趣味といふものは、他の濃厚なものよりも一層味はひ難い程度にまで進んでゐるのである。我が國の文藝が多く普遍性を失つて、俳諧は俳人のみに、和歌は歌人のみに歡ばれ來つたのは、こゝに主因があると信ずる。

淡きを好む傾向は、更に他面に於て、我が文藝殊に詩歌の類をして實生活と甚だしく隔絶せしむる原因をなした。抑實生活上の事は、常に人間の利害の念を喚起するものであつて、その利害の念は、やがて人生に對する烈しい刺激である。淡々たる趣味の鑑賞にのみ專らなる精神が、かゝる題目を避けようとする事は當然の傾向であらう。されば古い萬葉時代にあつては、貧民が租稅の誅求に惱む有樣も歌はれた、社會生活の道德的制裁も

チャムバレーン
我が國文學を研究した英人

教へられた。然るに平安朝に入つては、これらのものは總べて歌道の好題目に非ずとして排斥せられて、唯偏に風流な雪月花にのみ憧るゝものとなつたのである。チャムバレーンは日本人の所謂詩的といふ語が餘りに偏狹であるのを疑つて、世界何れの國にも見ない所であるといつてゐるが、げに我が國の詩歌の題材が極めて狹いといふ事は否むべからざる事で、この傾向が歩一歩甚だしくなると共に、益、實生活に遠ざかつて、普通の人間卽ち特別の修養のない人には、殆ど沒交渉のものたらんとするに至つたのである。これ亦普遍性を失つた一原因であらう。」顧みれば我が國の文藝が淡い趣味の上に立つてゐることは、上來說來つた諸原因がその根柢を成してゐるものである。一の淡い趣味といふ事は、種々の方面から、我が實生活と我が文藝と

を隔絕せしめて、終にその普遍性を失はしめた。かくして新日本の青年は、宛も會席よりも西洋料理を好むやうに、一も二もなく西洋文藝のみを崇拜するに至つた。彼等は香水の香に醉つて、薰香の幽かな薰りは全く感じ得ない有樣である。千年以來、我等の祖先の間に養はれ來つた彼の淡いなつかしい奧ゆかしい趣味は、今將に亡びようとしてゐる。

思ふに普遍性を失つた文藝は、健全なる發達を遂げた者といふべきではなからう。併しながら、其處に宿つた淡い趣味、幽かな匂ひは、我が國民性に獨特のものである。我等は果して默然としてその亡びゆくに任せてよいであらうか。（醒雪遺稿）

一九　四季の修養

加藤咄堂

加藤咄堂
名は熊一郎
丹波の人
明治三年生
文章家
論客

年茲に改まりて心も亦改まる。願はくは梅花とともに自ら新たならむ。自ら新たにするの工夫、これ向上發展の動機。今までは雪下に壓せられし野邊の草は、はや茁々として萌出で、梅花先づ春を報じて南枝二三輪、千紫萬紅に魁し、やがて柳は烟り花霞みては、春色滿地、詩人得意の天たり。嗚呼花を催すの雨は花を散らすの雨、得意の境はこれ失意の所。落英地に委し、燕子泥を銜む晩春の光景は、又吾等に戒心を催すものにあらずや。吾等の心身をして清爽ならしむるもの、夏の初めに過ぎたるはなし。「纖々たる碧草階と齊しく、濃綠陰中杜宇啼く。」初夏已に過ぎて炎帝更に威を弄し、燬くが如き酷暑人を熱殺するも、死中に活あり。驟雨忽ち一過して山更に青く、清風徐ろに樹梢を拂つて、涼しさのかたまりと見る夏の月の、水の如き空に澄渡るあれば、活中に死あり。吹く風のいつしか死して樹影動かず、萬籟寂として人は釜中に煮らるゝごとく、輾轉眠り成らざるあり。活中の死、死中の活、心頭を滅却する時、火もまた涼し。夏は以て吾等の心身を鍛錬す。

纖々たる碧草
纖纖碧草與レ階齊、濃綠陰中杜宇啼。（元の僧善住の詩の句）

涼しさの
涼しさのかたまりなれや夜半の月　（貞室）

心頭を云々
安禪不三必須二山水滅一却心頭一火亦涼。（快川和尚）

春は妖艶、夏は森嚴。一葉落ちて天下の秋を報じては、肅殺の氣人に迫る。況して漸く老いて、樹々の梢に紅葉して籬の菊の色褪せ、昨宵までも喞きし蟲のいづこに行きしや、其の音をとゞめず、窓を打つ木の葉の雨に似たる聲のみ聞ゆるは、いとゞ悲愁の情を深からしむるものにあらずや。自然は一切の粉飾を脱離し、人は內觀の眞を求む。三春の行樂夢と消えて、荒涼の景目に滿つ。されど天高く氣清し。「吾等の志をして天の如く高く、吾

三餘
魏の董遇の言

梟の聲云々
鴨長明の四季物語中の語

等の心をして氣の如く清からしめよ。」とは、秋の風物が吾等に促す教訓にあらずや。若しそれ夜雨蕭條たる時、獨り古人を友として且讀み且思へば、心内の收穫殊に多きを覺ゆ。秋は收穫の時期なり。

冬は歳の餘なり。古より讀書三餘を貴ぶ。夜は晝の餘、雨は晴の餘、冬は歳の餘。寒風窓を打つて凛冽の氣身に浸渡るを覺ゆるとき、埋火かきおこして書を繙き見よ。句々我が心に浸み、靈覺の心そゞろに我を動かすを感ず。冬は讀書の好季なり。晝短くして夜長く、活動に適せずして修養に適す。「梟の聲すさまじかりける松楓の枝も雪にあつごえ、狐山彦のあそび驅けりし亂菊の叢も霜白うおき渡したる、」冬野の景色は秋よりもうら悲しく、かくて今年も逝くかと思へば、一年の榮枯、身の盛衰、春立つ

心の欲する
七十而從二心所一欲不レ踰レ矩
（論語）

兼好法師
姓は卜部
後宇多上皇に仕へ、後出家した
正平五年歿
年六十九
徒然草はその隨筆

物のあはれ云々
春はたゞ花のひとへに咲くばかりものゝあはれは秋ぞまされる
（拾遺集、讀人不知）

日に企てし多くの心と違ひし今日此の頃、追懷の涙なきはあらじ。追懷はやがて發奮の動機、霜雪の苦を凌ぎてこそ花咲く春はあれ。四季をり〳〵季に觸れ節に應じて、練心の工夫を怠らずば、自然の風物も亦我が師とならん。

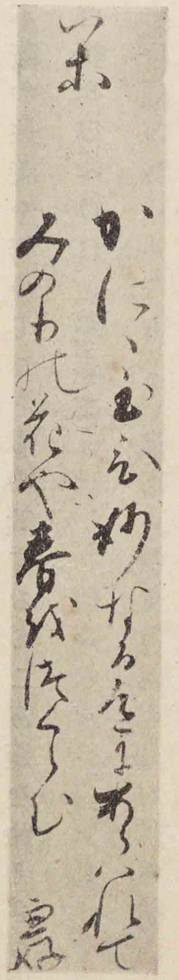
詩人は花に、月に、露に、霜に、思ひを凝らす。吾等も亦之に對して不斷の修養を努めてこそ、心の欲するところ矩を踰えざる境地に到り得べけれ。（書窓車窓）

二〇　徒然草より

兼好法師

をりふしのうつりかはるこそ
をりふしのうつりかはるこそ、物ごとにあはれなれ。
「物のあはれは秋こそ勝れ。」と人毎にいふめれど、それもさるもの

にて、今一きは心も浮立つものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども殊の外に春めきて、閑やかなる日影に、垣根の草萌出づる頃より、稍春深く霞み渡りて、花もやうゝ氣色立つ程こそあれ、折しも雨風打續きて心あわたゞしう散りすぎぬ。青葉になり行くまで、萬づにたゞ心をのみぞ惱ます。花橋は名にこそ負へれ、なほ梅のにほひにぞ、古の事もたちかへり戀しう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひ捨てがたきこと多し。



兼好筆

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂りゆく程こそ、世のあはれも人の戀しさもまされと人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月、あやめ葺く頃、早苗とる頃、水雞のたゝくなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月ばらへまたをかし。

棚機祭るこそなまめかしけれ。やう〳〵夜寒になる程、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づく程、わさ田刈りほすなど、取りあつめたる事は秋のみぞ多かる。又野分のあしたこそをかしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語枕草子などに事ふりにたれど、同じ事又今更にいはじとにもあらず。思しき事いは

閑
かにかほひ妙なる色にあらはれてみのりの花や春をつくらむ
兼好

花橘は云々
さつき待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする（古今集、讀人不知）

祭
賀茂祭
四月の中の酉の日に行はれる

思しき事
おぼしき事いはぬはげにぞ腹ふくるゝこゝちしける（大鏡）

吉田兼好

ぬは腹ふくるゝわざなれば、筆に任せつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやり捨つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬枯の景色こそ、秋にはをさ〳〵劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白う置けるあした、遣水より烟の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて、人毎にいそぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじき物にして見る人もなき月の寒けく澄める二十日餘りの空こそ、心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つなどぞ、あはれにやんごとなき。公事どもしげく、春のいそぎに取重ねて催し行はるゝさまぞいみじきや。追儺より四方拜につゞくこそおもしろけれ。晦の夜のいたう闇きに、松どもともして、夜半過ぐるまで人の門叩き走りありきて、何事にかあらん、ことゞ〳〵しくのゝしりて、足を空に惑ふが、曉方より

さすがに音なくなりぬるこそ、年の名殘も心細けれ。亡き人のくる夜とて魂祭るわざは、此のごろ都には無きを、あづまの方には尙することにてあるこそあはれなりしか。

かくて明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えねど、引きかへ珍しき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして花やかに嬉しげなるこそ、またあはれなれ。

子を法師になして

ある者子を法師になして、「學問して因果の理をも知り、說經などして世渡るたづきともせよ。」といひければ、敎のまゝに說經師にならむ爲に、まづ馬に乘習ひけり。輿車もたぬ身の、導師に請ぜられむ時馬など迎へにおこせたらむに、桃尻にて落ちなむは、心うかるべしと思ひけり。次に佛事の後、酒など勸むる事あらむ。

に、法師の無下に能なきは檀那すさまじく思ふべしとて、早歌と、いふ事を習ひけり。二つの業、やう〳〵さかひに入りければ、いよいよ能くしたく覺えて嗜みけるほどに、説經習ふべき隙なくて年よりにけり。

この法師のみにもあらず。世間の人なべてこの事あり。若きほどは、諸事につけて、身を立て、大いなる道をも成し、能をもつき、學問をもせむと、行末久しくあらます事ども、心にはかけながら、世をのどかに思ひて、打怠りつゝ、まづさしあたりたる目の前の事にのみまぎれて月日を送れば、事ごとに成す事なくして身は老いぬ。つひに物の上手にもならず、思ひしやうに身をも持たず、悔ゆれども、取りかへさるゝ齡ならねば、走りて坂をくだる輪の如くに衰へ行く。されば一生のうち、むねとあらまほしから

む事の中に、いづれかまさるとよく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひ捨てて一事を勵むべし。一日の中、一時のうちにも、あまたのことの來らむ中に、少しも、益のまさらむ事を營みて、その外をば打捨てて大事をいそぐべきなり。何方をも捨てじと心にとりもちては、一事も成るべからず。たとへば、碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人にさきだちて、小を捨て大につくが如し。それにとりて、三つの石を捨てて十の石に就く事はやすし。十を捨てて十一に就く事は難し。一つなりとも優らむ方へこそ就くべきを、十までなりぬれば、惜しく覺えて、多くまさらぬ石には換へにくし。これをも捨てずかれをも取らむと思ふ心に、かれをも得ずこれをも失ふべき道なり。

京に住む人、いそぎて東山に用ありてすでに行きつきたりとも、

西山に行きて、その益まさるべき事を思ひ得たらば、門より還りて西山へ行くべきなり。「こゝまで來着きぬれば、この事をばまづいひてむ。日をさゝぬ事なれば、西山の事は歸りて又こそ思ひたゝめ。」と思ふゆゑに、一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる。これを恐るべし。

一事をかならず成さむと思はば、他の事の破るゝをもいたむべからず、人の嘲りをも恥づべからず。萬事にかへずしては、一の大事成るべからず。人の數多ありける中にて、ある者、「ますほのすゝき、まそほのすゝきなどいふことあり。渡邊の聖、このことを傳へ知りたり。」と語りけるを、登蓮法師その座に侍りけるが、聞きて、雨の降りけるに、「蓑笠やある。かし給へ。かの薄の事ならひに、渡邊の聖のがりたづねまからむ。」といひけるを、「あまりにも

渡邊の聖
攝津の國渡邊、今の大阪の地に住んだ高僧であらう。

登蓮法師
歌に巧な僧で勅撰集にその歌が多く見える

のさわがし。雨やみてこそ。」と人のいひければ、「無下の事をも仰せらるゝものかな。人の命は雨の晴間をも待つものかは。我も死に聖も失せなば、たづね聞きてむや。」とて走り出でて行きつつ、習ひ侍りにけりと申し傳へたるこそ、ゆゝしくありがたうおぼゆれ。「敏き時は則ち功あり。」とぞ、論語といふ書にも侍るなる。このすゝきをいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。

敏き時は云々
恭則不レ侮、寛則得レ衆、信則人任焉、敏有レ功、惠則足二以使一レ人。

二一　成功とは何ぞや

浮田和民
安政六年熊本生
文章家
論客
法學博士

現今成功といふことは、學生間に一種の理想となつてゐる所の言葉であるが、これにも種々の意味があるので、一概にたゞ成功といふ字に眩惑されてはならぬ。或は名を成すことを成功と

してゐる人もある。或は富を爲すことを成功としてゐる人もある。或は功を立つることを成功としてゐる人もある。是等は一概に善いともいへぬが、又決して惡いといふことは出來ぬ。苟くも利己主義一遍でたゞ自己の快樂を遂ぐるを以て成功となす人でない以上、多少人の目的には善いところがある。凡そ名を成すといひ、富をなすといひ、また功を立てるといふことは、一面自己中心であるけれども、また他の一面には社會的要素があつて其の重きを爲さしむる所以となつてゐる。名は我が名なれども、これを聞傳へて名譽となすは他人である。他人を愛する心、社會を顧みる心あるに非ざれば、名の名とすべき價値は無いのであるから、名譽心は決して一概に擯斥すべきものでない。富を爲すといふことも同樣で、世人が富を貴び、社會が富を

要すればこそ、富を富として人々が慕ひ求むるわけである。自分一人ならば衣食住に差支なければ何等の不足もないわけである。何程多くの富を爲しても、衣服は知れたもの、食ふことも同樣、寢るにも五尺の身を容るゝ外必要はないものであるが、他人を思ひ、社會を思へばさうはいかぬ。つまり富を欲する根本の情は、人に社會的同情があるからのことである。功を立てるといふことは最も直接に社會公共の爲にすることで、愈以て利己主義一遍の精神でないことは明らかである。

果して然らば、功名富貴の根本的價値は社會のためといふことに歸着するのである。若しさうであるならば、眞正の成功といふことは社會のために善を爲すことで、必ずしも名をなし、富を爲し、功を立て、又は貴き位を得ることでないことも明白である。

名もない農夫も貧しい勞働者も、社會のために働く以上は成功の人といはねばならぬ。

誰も彼も名を揚げるならば名を成す人はない。誰も彼も富を爲すならば富者は無くなり、誰も彼も功を立てるならば特に功者は無いのである。これは理想としては甚だ望ましいことであるが、其の點に達せざる間、卽ち人間が不完全である間、功名富貴もまた社會進歩の方便として必要なる次第である。たゞ功名富貴を得ることのみが成功と誤解してはならぬ。これはただ成功の一の形式といふまでで、古來これに反して大成功をなした人が甚だ少なくない。ソクラテスは決して功名富貴の人ではなかつた。然しながらソクラテスの成功は如何にも大なるものであつた。基督は殆ど當時の人に知られなかつたので、

ソクラテス
希臘の大哲學者
（前四七〇―前三九九）

歴史上の人物とはいはれないけれども、神の右に坐する程の大成功をした。又論語や孟子や聖書の著者若しくは編纂者は、誰であるか分らぬけれども、其の名文にして道德上の勢力あること、殆ど他に比類のない程である。大成功は往々無名無位の人の所爲である。

若しそれ當世に名を揚げ、富を爲し、功を立てんと欲すれば、時の勢に從ひ、また時勢に乘ずるに若くはないが、是等は大成功の人といはれぬ場合も少なくない。若しまた自己の才能を發揮するを以て成功となす人は、時勢にかまはず、己が欲する所のこと、卽ち眞に己の好む所の事をなすに若くはないと思ふ。これ天才の人の選む所で、往々非常の逆境に陷ることもあるが、自己の才能を發揮するの方法は之に限るのである。要はたゞ己の好

富と貴きとは云々

子曰、富與レ貴是

む所果して己の長所であるか否かといふことにある。好きこそ物の上手なれば、大抵己の眞に好む所の事は其の天性の自然的長所に合するのである。即ち自己の長ずる所は大概その好む所となるのが通則である。併し往々下手の横好きといふ諺があるから、例外のあることを忘れてはならぬ。

されば時勢に乘ずるも可なり、時勢にかまはず自己の天才を發揮するも不可なし。要は唯社會の爲、人類の爲、大いに善を爲すの外はないのである。一鄕の爲に善を爲すも成功なり、一國の爲に善を成すも成功なり。併しながら世界のため、人類のためになる程廣く善を爲す人は、最も大なる成功者であるといはねばならぬ。

孔子曰く、「富と貴きとはこれ人の欲する所なり、其の道を以て之を得ざれば處らざるなり。貧と賤とはこれ人の惡む所なり、其の道を以て之を得ざれば去らざるなり。君子仁を去りて惡んぞ名を成さんや。」と。嗚呼仁なる哉、仁なる哉。仁を外にしては成功の價値何くにかある。（人格と品位）

人之所レ欲也。不下以二其道一得ヲ之、不レ處也。貧與レ賤是人之所レ惡也。不下以二其道一得ヲ之、不レ去也。君子去レ仁、惡乎成レ名。（論語）

二二　自發の工夫

德富蘇峰

一人前の人間たらんには、時計の針の如く、彈機を捲かれたる儘刻々として働くのみにて足れりとすべからず。人の人たるは、其の自發の工夫あればなり。若し他人の命令や、自他の約束や、前人の先例やに支配せられ、それ以外に活動する能はずんば、人は正しく器械のみ。吾人は之を目して半人前の人と云ふ。半人前も皆無に優る。されど果してかくの如くんば、人間も蒸氣

德富蘇峰
名は猪一郎
文久三年熊本生
文章家
論說家
國民新聞社長

機關と擇ぶ所なきなり。

文明は人を器械的ならしむ。分業は人を一個の齒車たらしむ。協同生活は人を全體として見ずして、部分として見る。されば文明世界に適合せんとせば、ある一面に於ては、人間の段階を降りて、自ら無機物の器械たるに甘んぜざるべからざる必要あり。吾人はこのことが文明の人類に及ぼす祝福なるか、はた呪詛なるかを知らざれども、事實誠にかくの如きを斷言するに遲疑せず。然れども、若し文明の人間に期する全き要求が、これに止まるとせば、文明とは頗る情なきものと謂はざるを得ず。惟ふに現狀を維持するだけならば、これのみにて妨げなかるべし。されど文明の第一義は人類の進歩にあり。而して此の進歩や實に各個人の自發的工夫に俟たざるを得ず。總べての人は、其の

本性として自ら完全を求むる傾向あり。たゞ此の傾向あり、これを以て敢へて現狀を改善せずんば止まざらんとす。蓋し個人に於ても、社會に於ても、進歩と秩序との併行は、要するに其の自發的本能と受動的服從との調和によるのみ。

唯其の調和を得るや、決して容易の業にあらず。ある時は餘りに器械的になり過ぎて、我にして我を亡ふことあり。或時は餘りに自發的に振舞ひて、仲間外れとなるものあり。然れども眞の文明人士たらんには、其の調和を是非とも保持する必要あり。

卽ち隊長の前にありては其の命令に服從する德を具へ、然も其の之を遂行するや、自ら最善の工夫を凝す能力を發揮せざるべからず。而して若し萬一隊長討死せんか、自ら代りて命令を傳ふるだけの覺悟はなくてかなはぬなり。吾人は戰場に於ての

みならず、總べての事に於て之を見ずんばあらず。器械的なる點は蒸氣機關よりも器械らしく、自主的なる點はローマ法王よりも自主的ならざるべからず。若しそれ文明の流弊を求めんか、動もすれば時計の如き人間を製造する事にあり。然も完全の時計と云はんよりも、安時計然たる人間を製造する事なり。彼等は其の彈機を捲く者なければ動かず。偶〻動くも、其の器械の脆弱なるが爲に忽ち狂ひを生ず。乃ち知らず識らず自ら靈妙なる人間を辭して、不完全なる器械となり、他に動かす者なき間は自ら其の手足だに動かさざるに至る。かくの如くして、文明社會は恰も蠶が繭を作りて其の中に屏息するが如く、總べての人を屏息せしむ。これ豈深憂大患にあらずや。

吾人は曾て白隱和尚の書を讀み、其の跋文の張五張六の譬喩に

白隱和尚
駿河の高僧
明和五年寂

至りて、茫然自失したりき。今其の概要を掲げんに、張五張六の兄弟、おの〳〵金一錠を得たり。相見ざる事三十年。張六貧困自ら給せず、行いて兄を訪ぬ。兄や富、王侯の如し。張六竊かに惟へらく、「一錠の金、なんぞかくの如き富を博し得ん。」と。怪しみて其の故を問ふ。兄曰く、「三十年前汝に別れ、久しからずして彼の金を失へり。」と。六、勃如として兄の面を熟視し、且我が身を顧みて曰く、「吾は護れり、兄は失へり。而して失へる兄はかくの如く尊大に、護れる吾はかくの如く貧困なり。」と。兄曰く、「汝が護る所は之を棄つる道なり。我が棄つる所は、之を護るの道なり。」と。蓋し弟は一錠の金を失はざらんと欲し、之を什襲して膚身に附け、日々夜々、唯之を護りたり。兄や之を資本として大いに商賣を試み、着々當れり。唯一錠の金のみ。而も自發的工夫の有無

の差は則ちかくの如し。智者の手に入れば黄葉も黄金なり。愚者の手に落つれば黄金も亦黄葉なり。駿馬は鞭影を見ずとも、自ら駛りて止まず。吾人は他人の命令指揮を俟たずとも自己分内の仕事に於て、自ら手持無沙汰ならざるだけの工夫あるを要す。豈啻これのみならんや。我が協同生活の境遇をして、完美ならしむるも、亦固より其の要素たる各個人の自發的工夫に俟たざるべからず。若し我に向上の精神燃えんか、總べての物みな我を啓發せざるなきなり。即ち天地萬物、順地逆境、悉くみな我が師たらざるはなし。自發とは、唯中に向上心の醒覺するを意味す。一たび斯の心の醒覺するあらば、如何なる工夫も出で來るべし。何ぞ一身一家の事のみならんや。經世濟民、決して望み難き業にあらず。

松平樂翁
名は定信
田安宗武の第七子、白河城主松平定邦の嗣となる。天明七年老中となる。文筆を樂しみ樂翁と號した。
文政十二年歿年七十二

松平定信

二三 雅文三篇

月のさしのぼるころ

松平樂翁

月のさしのぼる頃、曙の空おぼえて、横雲のたなびきたるにやゝ匂ひそめたれど、遠山の梢にいさようて姿も見えず、からうじてさし昇りけり。梢のうさも晴れにけりと思へば、いつしか雲の一つ出で來たるが、近寄るほどあやにくに月の方より雲のうちへかき入るやうに見ゆ。こはいかにせんとしばし打ちまもるに、雲の端つ方あかう見ゆるにぞ、出で離れたらば、はやかゝらん隈あら

花月草紙　松平定信の隨筆

壬子　享保十七年

室鳩巣　名は直清　德川幕府の儒官　享保十九年歿　年七十七

白駒の隙　人生三於天地之間一如二白駒之過レ隙一（莊子）

じと思ふに、いつのまにかまた白雲の月待顔にたなびきて見ゆれば、胸うちつぶれて打見るに、はじめの雲より出でたる光いと新しう見えて、ことにさやけし。かの待ちゐたる雲にむかへば、また馳せ入るもいとつらし。月の入りて見れば、雲もさすがにこちたからず。こゝかしこにそれと面影見ゆるにぞ、ひたすらに恨みはてで見ゐたるうちに、衣手もしめり行きて、露も蟲の音もさかりなりけり。つく〳〵と向ひゐたれば、心のはてなきやうにこそ覺えしか。（花月草紙）

○　壬子試筆の詞　室鳩巣

日月迭に移りて白駒の隙過ぎ易く、衰病日に侵して黃金の術成り難し。されば、犬馬の齡これまであるべしとも思はざりしが、何時しか老いの波寄り來て、今年は七十餘り五つの春にもなりぬ。あまさへ近き頃より、身に痿疾を得て手足もあがらず、起居もなやめるまゝ、昔の董生を學ぶにはあらねども、この三とせ春の園を窺ふ事もかなはねば、閨の中ながら、梢に傳ふ鶯の音に殘りの夢をさまし、枕に薰る梅が香に過ぎし昔をしのぶばかりになむありける。しかはあれど、幸に若かりし時より學びの窓に年を經るかひありて、程朱の道に從ひて鄒魯の風をたづね、韓歐が文を好みて邯鄲の步み

董生　支那漢代の儒者　董仲舒のこと。下レ帷發レ憤讀レ書、三年不レ窺レ園。（漢書董仲舒傳）

程朱　程は宋代の學者　程顥・程頤、朱は朱熹。

鄒魯　鄒は孟子、魯は孔子の生國

直清撰文以書其後想昔為藩臣事
矣於國竊見其用意於治之深日久蓋
矣之取人用材必皆英偉俊傑極一時之
選而一藝偏長之士亦無不膚烏豈非收
之廣而擇之精者乎其收天下之書亦由
斯道爾遂言曩昔之所見以塞今者之虛
意
享保二年歲次丁酉秋七月三日
英賀室直清謹識

鳩巣筆蹟

韓歐
韓は唐代の文章家韓愈
歐は宋代の文章家歐陽修

邯鄲の歩み
子獨不レ聞ヲ夫壽陵餘子之學ニ行於邯鄲一與、未レ得ニ國能一、又失ニ其故行一矣、直匍匐而歸耳（莊子）

富貴は云々
不義而富且貴於レ我如ニ浮雲一。（論語）

禍福は云々
禍之與レ福兮、何異ニ糾纆一。（漢書）

蚍蜉云々
蚍蜉撼ニ大樹一可レ笑ニ自不レ量。（韓愈の詩句）

精衞云々
發鳩之山有レ鳥、曰ニ精衞一。（中略）取ニ西山之木石一、以塡ニ東海一。（山海經）

を學ぶに、老いの寐覺も慰みぬべき。」

さても多くの年月を經て、世の移り變る有樣を考ふるに、盛衰榮枯互に行交ふをば、夢とやいはん現とやいはん。誠に、「富貴は浮かべる雲の如く、禍福は糾へる繩の如し。」と言へるに何か違ふ事あるべき。中に唯わが聖人の建て給へる三綱五常の道のみ、天地と竝び傳へ、古今のへだてなく、是計りは變る事あるべからず。人として仰ぎ崇ぶべきは此の道ぞかし。然れども、儒教世に行はれざりしより、人々義理に疎く利欲にさとくなる程に、五常の道廢れて、一代の風教を維持せんとも、わが力及ぶべきにあらねば、偏に蚍蜉の樹を撼かし精衞が海を塡むるに似たるべし。

さはいへど、世を憂へ民を新たにするも、吾が儒分内の事なれば、是を度外に置くべきにもあらず。如何なれば世に老師宿儒と

駿臺雜話
室鳩巢の隨筆

稱する人の、好んで異說を肆にし、又は他道を雜へて、仁義五常の沙汰をば餘處にする。そは唯務めて新奇を競ひて俗耳を悅ばしめ、時好に投ずるなるべし。いと口惜しき事なり。古人のいはゆる阿世曲學とは、是等を謂ふなるべし。

よし人はさもあらばあれ、たとひ風俗は昔にあらずなりぬとも、我が身一つはもとの如く仁義の道を守りつゝ、前修の模範を失はじと思ふこそ、せめて儒となりしるしともいふべけれ。然るに新玉の春の初めとて、人は皆己が志身の福を萬代と祝ふ中に、我は唯五常の道に心を寄せて、何時も變らずめでたきものは斯の道なりとて、かくなん筆を試みるならし。

この春もかはらで行かん七十路に
あまる五つの道をたづねて（駿臺雜話）

村田春海
國學者
加茂眞淵の門人
文化八年歿
年六十六

古の人云々
清少納言の枕草子の「すさまじきもの」のうちに出てゐる

隨時樓の記

村田春海

うつせみの世の人のことわざ萬づにさまざまなれど、時にそむき折にあはでつきぐしからざらむは、いみじきふしなりとも、いかで心のゆくわざなるべき。されば夏の日は埋火の暖かなるを思はず、冬の夜に氷水の涼しさをば忘れつべし。古の人も、春の網代八月の白がさねをこそ、すさまじきことのためしには引き出でたりけれ。かゝればはかなきすさみも折にあひたるはをかしく、見所なき木草も時を得たるはめづらかになむ覺ゆめる。

村田春海

しかはあれど人草しげき巷の、所せく門立て竝べたらむあたりには、時を過ぐし折を失ふたぐひ多くて、月に便りよきは花に疎く、水に由あるは山遙かにて、四つの時の行き廻るに隨ひて心をやるべき住ひは、いとも〳〵かたしや。

茲に前田の主の高殿こそ、あやしく所得ては覺ゆれ。後は市路につゞくものから、前は世離れたる望あり。春はをのへの花のかをりを居ながら袂にしめ、夏は水際清き池の蓮葉を舟ならずして手折り、秋は月にうそぶき、冬は雪にうたふもずべて山水のあはれをそへざる折なむあらざりける。ましてあるじの言の葉もて友に交らふこと廣ければ、時にふれ折を過ぐさず、訪ひ來る人々、皆みやび好まざるはなし。かくとこしへに飽く世も知らぬ高殿なればとて、閑中大德の殊更に時に隨ふてふことをもて名づけられたるは、深き心しらひにこそありけらし。（琴後集）

土井晩翠
名は林吉
明治四年仙臺生
新體詩家
第二高等學校教授
南陽
河南省南陽府

梁父吟
步出二齊城門一、遙望二蕩陰里一、里中有二三墳一、累累正相似、問是誰家塚、田疆古冶氏、力能排二南山一、文能絕二地紀一、二桃殺二三士一、誰能爲二此謀一、相國齊晏子。

二四 出廬

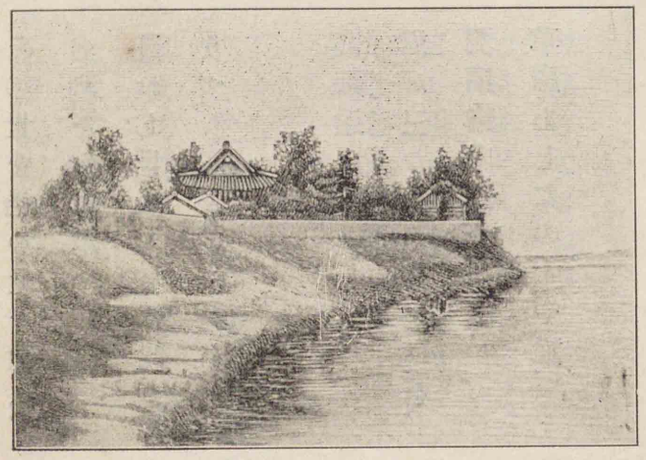
土井晩翠

嗚呼南陽の舊草廬、
夢はたいかに安かりし。
二十餘年のいにしへの
光をつゝみ香をかくし、
隴畝に民とまじはれば、
王佐の才に富める身も、
たゞ一曲の梁父吟。

閑雲野鶴空ひろく、
風に嘯く身はひとり、
月を湖上に碎きては、
ゆくへなみまの舟一葉、
ゆふべ暮鐘に誘はれて、
訪ふは山寺の松の風。

江山さむるあけぼのの、
雪に驢を驅る道の上、

隆中
湖北省襄陽縣の西



諸葛孔明祠堂

寒梅瘦せて春はやみ、
伴は野鳥の暮の歌、
幽林蔭をたどるとき、
紫雲たなびく洞の中、
誰ぞや棊局にむかふ友。

その隆中の別天地、
空のあなたを眺むれば、
大盜きほひはびこりて、
荒びて榮華さながらに、
風の枯葉を掃ふごと、
治亂興亡あとみれば、
世は一局の棊なりけり

臥龍の名
徐庶見二先主一、先主器レ之、謂二先主一曰、諸葛孔明臥龍也、將軍豈願レ見レ之乎。（蜀志）

君
蜀漢の先主劉備

その世を治め世を敎ふ、
名利を俗に求めねば、
亂れし世にも花は咲き、
うつりはここに二十七。」

高眠遂に永からず、
君が三たびの音づれを、
羽扇綸巾風かるき、
草廬あしたの主や誰。

古琴の友よさらばいざ、
殘月の影よさらばいざ、

經綸胸にあふるれど、
岡も臥龍の名を負ひつ。
花また散りて春秋の、

信義四海に溢れたる、
背きはてめや知己の恩。
姿は變へで立ちいづる。

あかつきさむる西窓の、
白鶴かへれ嶺の松、

蒼猿ねむれ谷の橋、
草廬あしたは主もなし。

岡も更へよや臥龍の名。

成算むねに藏まりて、
たゞ掌上に指すがごと、
見よ九天の雲は垂れ、
蛟龍飛びぬ淵の外。

乾坤こゝに一局棊、
三分の計はや成れば、
四海の水は皆立ちて、

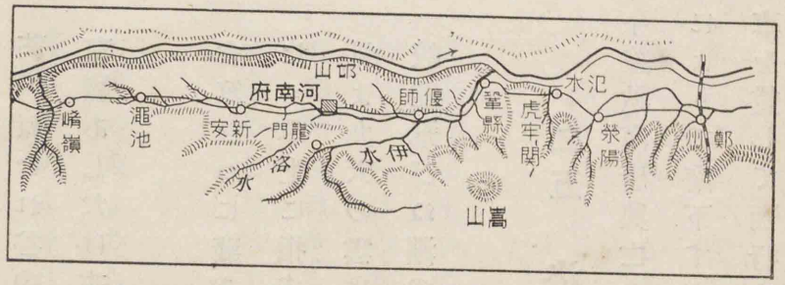
（天地有情）

二五　洛陽と長安

內藤湖南
名は虎次郎
秋田縣の人
漢學者
文學博士
京都帝國大學敎授

今茲秋、漢唐興亡の跡を訪はんと欲して北京を出づ。京漢鐵道によりて南下すること凡そ二十時間、鄭州にして汽車を棄て、馬車を賃して西行す。道は黃河の南にあり、その流域に沿へりと

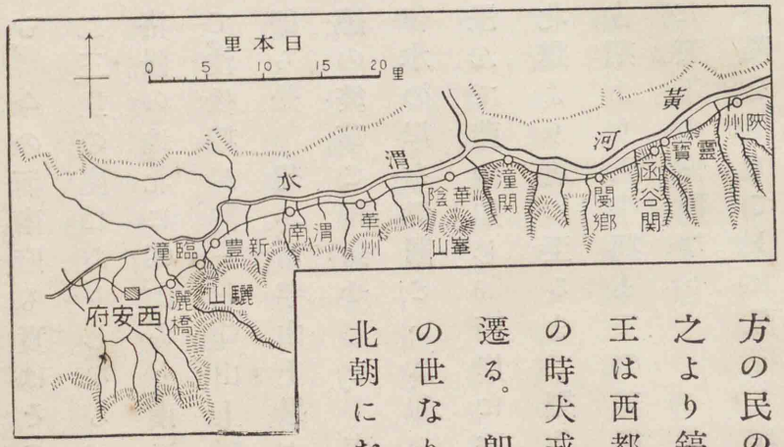
五嶽
泰山・華山
衡山・恆山
嵩山



いへども、遠く河岸を離れたれば、混々たる濁水の漲るを見ずして、丘陵起伏せる只一帶の高原を走る。滎陽は漢の高祖の臣紀信が、その主に代つて項羽に焚殺されし處。これを過ぎ、虎牢の險を越ゆれば、鞏縣の南に嵩山を望む。嵩山は五嶽中の最も高きものにして、その高さ約八千尺。鄭州より三日、わが里數三十七八里にして河南府に入れり。

河南省河南府は、卽ち洛陽なり。周の武王は鎬京に卽位せしが、別に都をこの地に營まんとして果さず。成王の時に至りて、周公遂に王城を築く。以爲らく、洛は天下の中なり、四

犬戎
今の陝西省鳳翔府の北境に居た種族



方の民の入貢するに當りて里程相均しと、之より鎬京を西都といひ、洛陽を東都と稱し、王は西都に居て諸侯を東都に會せり。平王の時犬戎の壓迫を避け、西都を棄てて洛陽に遷る。卽ち周室の東遷にして、これより東周の世なり。後、東漢・西晉もこゝに都し、また南北朝における後魏の帝都たり。隋の煬帝別宮を營みて大いに土木を起し、唐の時また東都と稱せられたり。されど星移り物變り、奕世帝居の跡絕えて礎石をだに止めず、秋風蕭條人をして空しく俯仰の感に禁へざらし

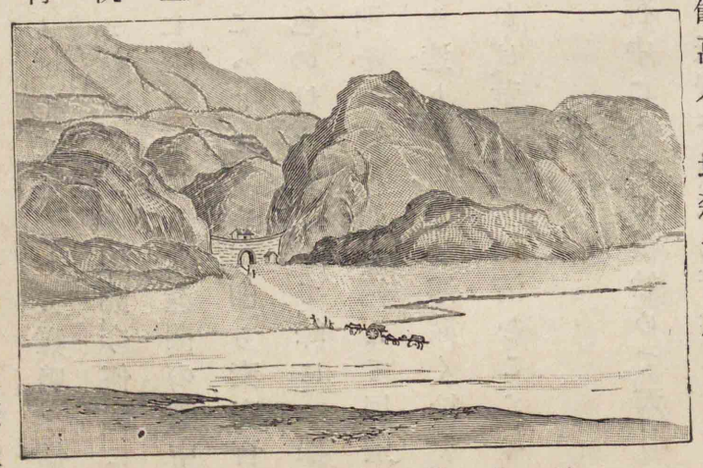
沈佺期
初唐の詩人
北邙山上云々
北邙山上列二墳塋一萬古千秋對二洛城一城中日夕歌鐘起、山上唯聞松柏聲。

む。今の河南府も實はその故地にあらず、按ふに舊都はその東二三里の處にありしなるべしといふ。

洛陽の地、北に邙山あり、南に伊洛あり。邙山は洛陽の墓地にして、沈佺期が詩に、「北邙山上列二墳塋一、萬古千秋對二洛城一。」といへるもの卽ち是。想ふ、當年山上累々たる青塚、悲風白楊に吹いて城中歌鐘の繁華と相對せしを。南の方洛水を渡れば、更に伊水あり。伊水の岸を伊闕といふ、卽ち龍門なり。斷岸絶壁河を挾み、水は澄んで藍の如し。兩岸に許多の洞穴を掘り、洞壁に佛像を彫る。北魏より唐に至るまで製作の年代歷々として明らかに、わが推古期より天平期までの美術との樣式の關係一々指摘すべく、また天下の偉觀なり。

洛陽を出でてまた西行すれば、新安より道は上つて高原地に入

る。新安は項羽が秦の降卒二十餘萬人を坑殺せし處。その西澠池に會盟臺あり。昔秦王と趙王と會するや、秦王趙王を促して瑟を鼓せしめしに、趙の臣藺相如また秦王に迫りて缶を擊たしめんとし、五步の內臣頸血を以て大王に濺ぐを得んといへる處是なり。澠池の西崤嶺の險を越えて、函谷の天險に入る。凡そ二里の間巉崖左右に聳え立つて、車軌を竝ぶるを得ず、騎列を爲すを得ず。老子が青牛に乘りて關を出でんとし、關令の爲に道德五千

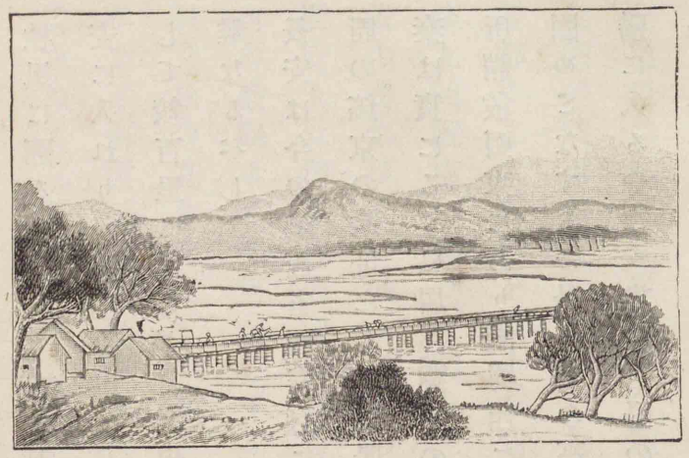


函谷關（高島北海支那百景）

言を遺して、去つて終る所を知らずといへるは、果してこの關なりや否や。孟嘗君が秦より逃れんとして、客をして雞鳴を爲さしめ、曉を待たずして出できといふ。その故關の跡、今何處にかある。函谷を踰ゆれば卽ち關中にして、更にまた潼關の關中第二の險といふあり。洛を出でてこゝに至るまで、卽ち秦塞百二と稱するもの。山又山すべて赭色の粘土質にして、峰に一株の綠なく、土に一點の青なく、道は谿間を歩むが如く、絶えて展望の景なく、晴には黃塵曚々として車を遮り、雨には泥濘深く輪を沒す。かくの如き地に沿うて流るれば、黃河が千秋清むことなきも所以あるなり。

潼關を出づれば一望開豁、久しく窖中にあつて後始めて天日に接したるが如く、快いふべからず。沃野千里、秋色蒼然として關

中に滿つ。須臾にして左に華山を望む。高さ僅かに五千尺許りといへども、山勢極めて崢嶸なり。新豐は卽ち鴻門の故地、漢の高祖と項羽との會に、樊噲が盾を擁し闥を排して入れりと稱せらるゝ處卽ち是。臨潼の城外に驪山あり。驪山の麓に華清宮あり。溫泉、水尙滑らかなれども、彫欄朽ちて草離々たり。行いて灞橋に至れば、長安早く眼前に在り。曩時、人の長安を出でて東行するものあれば、別れを送つてこゝに依々の情を敍べたり。「楊柳含烟云々



灞橋（高島北海支那百景）

溫泉水滑らか云々

春寒賜レ浴清華池、溫泉水滑洗二凝脂一（白樂天の長恨歌の一節）

楊柳含烟云々

戎昱の詩句

故園の情
誰家玉笛暗飛レ聲、散入二春風一滿二洛城一此夜曲中聞二折柳一何人不レ起二故園情一（唐の李白の詩）

灞岸春、年々攀折爲二行人一。」とは之をいへるなり。余今獨り衰柳の秋風に翻るを見る。亦故園の情を起さざらんや。かくして長安に入れり。洛陽を出でしより日を歴ること十日、わが里數にして較百里に足らず。鄭州よりは、凡そわが東京と京都との距離なるべし。

長安は今の陝西省西安府にして北に渭水あり、南に終南山あり。周の鎬京の遺址にして、咸陽・阿房二宮の跡またその近郊にあり。秦は實にこゝに居り、關中の險に據りて覇を天下に唱へしなり。所謂殽函東にあり、隴蜀西にあり、山を被り、河を帶びて四塞以て固めとなすもの是。漢の高祖既に秦を破り、天下を平定して洛陽に入るや、齊人婁敬、洛陽の地の天下の中にして、德あれば興り易く、德なければ亡び易きを說き、勸むるに秦の故地に據らんこ

未央・長樂
未央宮・長樂宮共に漢代の故宮である

唐人
唐の荊叔のこと

とを以てせしかば、乃ち卽日駕を旋し、長安に入りて西漢の帝業を奠めたり。今尙荊藪の裡、未央・長樂の古瓦を索め得べし。南北朝の時西魏またこゝに都し、尋いで隋を經唐に至りて、長安は帝都として壯麗を極め、華闕・朱樓岧々として浮雲の外に立ち、三條九陌縱橫に開け、千門萬戸參差として甍を竝ぶ。わが奈良平安の舊都は之に倣うてその規模を縮小せしものなり。今日の西安、また河南以西の大都會たるを失はずといへども、しかも漢唐の盛觀よく幾何か存する。滄桑變じ易く、昔時金階・白玉の堂、只青松の在るを見るのみ。唐人が古を懷うて、「漢國山河在、秦陵草樹深、暮雲千里色、無二處不一傷心一」といひしもの、今また唐人に對して重ねて之を言はざるを得ず。

二六　國民的自覺

大住嘯風
名は舜
萬朝報記者

眞理に遵ひ正義の道を踏んで、歩一歩世界に出ようとする日本の若い希望は、今や將に灼熱の域に入らうとしてゐる。鐵は灼熱の時に於てこれを打ちこれを鍛へねば、忽ちに熱を失つて終に永くこれを擴充する機會を失ふ。

凡そ國家の大いに興隆する時機は、歴史の教へるところに從へば概して一世紀半世紀の間である。この間に大いに延び、大いに擴がり、精神的にも物質的にも發展を策せねば、その國家は永く偉大な功績を歴史上に投げ、人類文化の上に貢獻することが出來ない。

國家が内外兩面に向つて擴張し、充足するに際して、國家を組織する國民たるものは、晏然と手を拱いて成るを俟つてゐることは出來ない。國民各個の力の可能をば極端まで活動させ、奮然として、その力を竭さねばならない。恰も一物體を組織する極微分子が、表面は極めて平穩に見えても常に永久に旋渦運動を行ひ、一瞬一刹那もこれを止めないやうな覺悟がなければならない。この覺悟から現はれる努力は、やがて國民としての自覺であり、國家としての勃興的氣運である。國民がかゝる自覺をなし、國家をして勃興的氣運に立たしめた時、國民は決して偷安怡樂の狀態にあつてはならない。絶え間ない活動と努力とのために、心身兩面の可能を力强く外界に押出し、種々の樣式の下に自我を充足するところの行爲に身を委ねねばならない。隨つて心の弱い氣力の横溢しない個人に對しては、かゝる自己充足は決して喜ばしいことではないかも知れない。年老いたロ

ーマは、かゝる奮鬪を若い隷屬に委ねて、自分は肌に溫かい泉に浴し、頽廢の怡樂を飽くまで掬さうとしたのである。しかしかる頽廢の怡樂は、年若い今の日本、何よりも自己の充足を欲する現在の我が國民の全く知らないところ、また知らうと欲しないところである。どんな苦しみも面のあたり來れ、我これを超えて進まうといふ男らしい努力の苦しみが、却つて我に歡喜を叫ばしめる。

世界は渾然として一世界である。何故に東にあるものと西にあるものとの間に可能の相違があるか。すべての文明の形式に、傳統上の差異のあることは之を認めるが、同じく人間生活の適應を動機として生じた文明について、何故にこれが悉く優り、彼が悉く劣ることを斷言し得るか。優るといひ劣るといふの

は、此の文明の形式が彼のに比して、その生活に適することの多いか少ないかの謂ひに外ならない。凡ての生活に適應して毫も違はないやうな形式は、世界いづれの處に於ても有るものでない。もし有ると信ずるものがあれば、そは誤つた感情から出た虛僞の推論か、または迷信である。久しい間自己の文明を以て東洋に臨んだ西洋は、その物質的の形式を東洋のために攝取されるに及んで、全くその長所を奪はれ、それ以外に東洋に對して優るところがないことを自覺し、漸次にその迷信から醒めようとしてゐる。さうして一面に於て、精神が聰明で、他の優秀な文明の傳統形式を有する日本は、西洋文明との接觸によつて、その長所を攝取するとともに、大いに自己の長所を自覺し、この自覺を努力の形に於て實現しようとする計畫をば着々として進

めて來た。日本に於ける東西文明の接觸は、西洋に對しては彼等從來の推論の虚僞であつたことを自認させて、この迷信から醒めさせるとともに、自己によつて自己を充足しようとする努力を生じた。

ドイツが東洋に於ける策源地を失ひ、英露佛各國が東洋の天地を日本に委して毫も悔むところなく、日本をして東洋の盟主たらしめるに至つた現在の大勢をば、單に世界戰爭の齎した結果だと思ふが如きは、未だ人間生活の底に流れてゐる思想に徹した觀察ではない。およそ歷史上の事實は、必ずこれに先立つかまたはこれに併行する思想の周旋がなければならない。政治文藝宗教、どんな運動にも、一箇の事象には必ず二箇の傾向がある。一は具象的の事實で、他はこれを裏づける哲學である。か

コンドルセ　佛國革命の犧牲となつた自由思想家（西暦一七四三―一七九四）

フィローン　アレクサンドリアの哲人猶太人（紀元前三十年頃から紀元後五十年頃まで）

ロゴス　超絶的な神と現實世界との媒介をなす神的な力

の貴族と愛國者とを勦絶したフランス革命の裡には、十八世紀末の共和黨の帽と矛と銃との影があり、その後にはコンドルセのやうな思索家のゐることは、恰も肉身のヤソの後にアレクサンドリヤのフィローンがロゴスの哲學を有すると同じである。」

列强が東洋を日本に委せようとし、日本が東洋の盟主として東洋の結締を固め、東洋を世界に押出さうとする努力は、決して肉と機械との勝利だけではない。それを裏づける東洋の自覺、心身兩面に於て毫も他に優るとも劣らないといふ自覺から獲て來た勇氣である。もしこの勇氣に伴なふ努力が具體的の事實となつて現はれるに當つて、他が之を目して以て帝國主義とし、又は武力主義とすることがあつても、それは日本の與り知る限りではない。日本が據つて以て準繩とすべきは眞理であり、正

義である。どんな壓迫と脅威とが來ても、この眞理と正義とに從ふ民族の勃興は、之をどうともすることを得ないではないか。日本は今やこんな大きな自覺によつて灼熱されてゐる。國民はこの灼熱した間に擴充せねばならないし、世界は當然この擴充に對してその場所を供せねばならない。（眞を慕ひて）

中等新國文　卷八　終

常用漢字表（大十正二年五月文部省臨時國語調査會決定）

〔凡例〕

（一）本表にない漢字は假名で書く。（二）固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、たゞし外國（支那を除く）の人名地名は假名書とすること。（三）代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞および助詞はなるべく假名で書く。（四）外來語は假名で書く。

【一】一丁七丈三上下不世丙並【丨】中【丶】丸主【ノ】久乏乘【乙】乙九乞也乳亂【亅】了事【二】二云互五井【亠】亡交京亭【人】人仁仇今介仕他付仙代令以仰仲件任企伊伏伐休伯伴伺似但位低住佐何余佛作使來例侍供依侮候侵便係促俊俗保俠信修俳俵俸倂倉個倍倒候借倫假偉偏停健側偶傍傑備催働傳債傷傾僅像僚僞僧價儀億儉儒償優【儿】元兄充兆兇先光兌免兎兒兔【入】入內全兩【八】八公六共兵具典兼【冂】冊再【冖】冠【冫】冬冷凉凖凌凍凝【几】凡【凵】凶凸凹出【刀】刀刃分切刈刊刑列初判別利到制刷券刺刻則削前剛副割創劇劍劑【力】力功加劣助努効勅勇勉動勘務勝勞募勢勤勳勵勸【勹】勺匁包【匕】化北【匚】匹區【十】十千升午半卑卒卓協南博【卜】占【卩】印危却卵卷卽卿【厂】厄厘厚原【厶】去參【又】及友反叔取受叛【口】口古句叫召可叱史右司各合吉同名后吏吐向君呑吟否含呈吸吹告周味呼命和咽哀品員哲唐唱商問啓善喉喜喪單嗣嘉嘗器噴嚴囑【囗】囚四回因困固國圍園圓圖團【土】土在地坂均坊坐坑坪垂型垣埋城域執培基堀堂堅堤堪報場塔塗塚塵境墓墜增墨墮壁壇壓壞【士】士壯壹壽【夂】夏【夕】夕外多夜夢【大】大天太夫央失奇奉奏契奔奢奥奪奬奮【女】女奴好如妃妊妙妨妹妻妾姉姑姓委姦姪姫姻姿威娘娯娠婚婦婿媒嫁嫉嫡嫌孃【子】子字存孝季孤孫學【宀】宅宇守安完宗官定宛宜客宣室宮宰害宴家容宿寄密富寒察寡寢實審寫寛寶【寸】寸寺封射將專尉尊尋對導【小】小少尙【尢】就

【尸】尺尼尾尿局居屆屈
屋展層履屬【山】山岡岩
岬岳岸峠峯島峽崇崎崩
嶮【巛】川州巡巢【工】工
左巧巨差【己】己【巾】市
布帆希帖帝帥師席帳帶
常帽幅幕幣【干】千平年
幸幹【幺】幻幼幾【广】床
序底店府度座庫庭庶康
廉廊廟廢廣廳【廴】延廷
建廻【廾】弄弊【弋】式
【弓】弓弔引弘弟弱張强
彈【彡】形彩彫影【彳】役
彼往征待律後徐徑徒得
從御復循微徵德徹【心】
心必忌忍志忘忙忠快念
忽怒思怠急性怨怪怯恐
恥恨恩恭息悅悔悟患悲
悼情惑惜惠惡惰惱想愁
愉意愚愛感慈態慕慘慢

慣慨慮慰慶慾憂憐憚憲
憶憾憤懇應懲懷懸戀
【戈】成我戒戚戰戲戴
【戸】戸戻房所【手】手才
打托扱扶批承技抑投抗
折抱抵押抽拂拍拒拓拔
拘拙招拜括拳拾持指振
捌捕捧捨掃授掌排掘掛
採探控推接提揚換握揭
揮援損搖搜摘携摩撫擇
擊操擔據擬擴攝【支】支
【攴】收改攻放政故效敍
敎敏救敗敢散敬敵敷數
整【文】文【斗】斗料斜
【斤】斤斥斬新斷【方】方
施旅旋族旗【无】旣【日】
日旦旨早旬旭昇昌明易
昔星春昨是時晚晝普景
晴晶智暇暖暗暑暮暴曆
曇曜【曰】曲更書曹會替

最會【月】月有朋服朕朗
望朝期【木】木未末本札
朱机朽杉李材村杖束柿
杯東松板枕林枚果枝枯
架柄某染柔查柩柱柳栗
校株根格栽桃案桐桑桶
梅條梨梯械棄棋棒棚棟
森棺植楠業極榮構概樂
樋樓標樞模樣樹橋機橫
檄檜檢櫻欄權【欠】次欲
款欺歌歎歐歡【止】止正
此步武歲歷歸【歹】死殁
殊殉殖殘【殳】段殺殼殿
毀【毋】母每毒【比】比
【毛】毛毫【氏】氏民【气】
氣【水】水氷永汁求汗汚
江池決汽沈沒沖沙河沸
油治沼沿況泉泊法波泣
泥注泰泳洋洗津洪洲活
派流浦浪浮浴海浸消涉

液淑淚淡淨淫深混淸淺
添減渡溫測港渴游湖湧
湯源準溝溢溶溺滅滋滑
滯滴滿漁漂漆漏演漕漠
漢漫漸潔潛潮澤激濁濃
濕濟濫濱瀧灌灣【火】火
灰災炊炎炭烈烏無焰然
煉煎煮煙煤照煩熊熟熱
燃燈燒營燭爆爐【爪】爪
爭爲爵【父】父【片】片版
牌牒【牙】牙【牛】牛牧物
牲特犧【犬】犬犯狀狂狐
狩狹狠猛猫猶猿獄獨獲
獵獸獻【玄】玄率【玉】玉
王玩珍珠班現球理琴
【瓜】瓜【瓦】瓦瓶【甘】甘
甚【生】生產甥【用】用
【田】田由甲申男町界畏
畑畔畜畝略番畫異留當
疊【疋】疋疎疏疑【疒】疫

疲疾病症痕痘痛痢療
【癶】登發【白】白百的皆
皇【皮】皮【皿】皿盆益盛
盜盟盡監盤【目】目盲直
相省眉看眞眠眺眼着睡
督睦瞭【矢】矢知短【石】
石砂砲破研硬硯碁碎碑
確磁磨礎【示】示社祈祕
祖祝神票祭禁禍福禦禮
【禾】秀私秋科秒租秤秩
移稅程稚種稱稻稼稿穀
積穗穩【穴】穴究空穿突
窃窒窗窮【立】立章童端
競【竹】竹竿笑笛笠符第
筆等筋筒答策箇算管篇
箱節範築篤簡簿籍【米】
米粉粒粘粗粟粹精糖糞
【糸】系紀約紅紋納純紗
紙級紛素紡索紫累細紳
紹紺終組結絕絞絡給統

絲絹經綠維綱網綴綻綿
緊緖線締緣編緩緯練縛
縣縫縮縱總績繁織繕繪
繭繰繼纂續【缶】缺【网】
罪置署罰罵罷羅【羊】羊
美羣義【羽】羽翁翌習翼
【老】老考者【而】耐【耒】
耕【耳】耳耽聖聘聞聯聲
職聽【肉】肉肋肖肝股肥
肩肯育脅肺胃背胎胞胴
胸能脂脇脈脊脚脫腎腐
腕腦腰腸腹腺膏膚膜膝
膳膽臆臟【臣】臣臥臨
【自】自臭【至】至致臺
【臼】臼與舅興擧舊【舌】
舌舍【舛】舞【舟】舟航般
舵舶船艇艘艦【艮】良
【色】色【艸】芋芝花芽芳
苑苗若苦英茂茶草荒荷
莊莖菊菌菓菜華萩萬落

葉著葬蒔蒙蒸蓄蓮蔓蔭
薄薦薪藍藏藝藤藥蘇
【虍】虎虐處虛虜號【虫】
蚊蛇蛙蜂蜜融蟲蠶蠻
【血】血衆【行】行術街衝
衡衞【衣】衣表衰袂袋袖
被袴裁裂裏裕補裝裸製
複褒【西】西要覆【見】見
規視親覺覽觀【角】角解
觸【言】言訂計討訓託記
訟訪設許訴診詐詔評詞
詠詣試詩詰話詳誅誇誌
認誓誕誘語誠誤誦說課
誼調談請諒論諫諭諸諾
謀謁謂謙講謝謠謹證識
譜警譯議護譽讀變讓
【谷】谷【豆】豆豐【豕】豚
象豪豫【貝】貝貞負財貢
貧貨販貫責貯貳貴買貸
費貿賀賃賄資賊賑賓賜

賞賢賣賤賦質賴購贈贊
【赤】赤赦【走】走赴起超
越趣【足】足距跡路踊踏
蹟蹴躍【身】身【車】車軌
軍軒軟軸較載輔輕輝輩
輪輸輿轉【辛】辛辨辭辯
【辰】辰農【辵】込辻迎近
返迫迭述迷追退送逃逆
透逐途通速造逢連週進
逸遂遇遊運過道達違遙
遞遠遣適遭遲遷選遺避
還邊【邑】那邦邪邸郊郎
郡部郵都鄕【酉】酌配酒
酢酬酷酸醉醜醫【釆】釋
【里】里重野量【金】金釜
釘針釣鈍鈴鉛鉢銀銃銅
銘銳鋒鋼錄錢錦鍋鍛鎌
鎖鎭鏡鑄鐘鐵鑑鑛【長】
長【門】門閉開閏閑間閣
閱關【阜】防附降限陛院

陣除陪陳陰陵陶陷陸陽
隅隆隊階隔隙際障隣隨
險隱【隹】隻雀雄雅集雇
雌雙雜離難【雨】雨雪雲
零雷電需震霜霞霧露靈
【青】青靜【非】非【面】面

【革】革靴鞍【音】音響
【頁】頂頃項順須頓預頑
頒領頭頻題額顔願顕類
顧顯【風】風【飛】飛飜
【食】食飢飲飯飾養餓餘
餅館饉【首】首【香】香

【馬】馬馳駁駄駐騎騰騒
驅驕驗驚驛【骨】骨髄體
【高】高【髟】髪【鬥】鬪
【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮鯉
鯛鰹【鳥】鳥鳩鳴鶴鶏
【鹵】鹽【鹿】鹿麗【麥】麥

【麻】麻【黄】黄【黑】黑默
點黨【鼓】鼓【鼠】鼠【鼻】
鼻【齊】齊齋【齒】齒齢
【龍】龍【龜】龜

（以上、千九百六十二字）

常用漢字表 終

古

一九三四（文永一）	後宇多	阿佛尼
一九六八（延慶元）	花園	
一九七八（文保二）	後醍醐	
一九九九（延元四）	後村上	吉田兼好
		北畠親房
		頓阿
二〇二八（正平三）	長慶	宗良親王
二〇四二（永德二）	後小松	
二〇八八（正長元）	後花園	一條兼良
		太田道灌
		宗祇
二一二四（寛正五）	後土御門	山崎宗鑑

古今著聞集
宇治拾遺物語
十六夜日記
玉葉集
増鏡
新葉集
太平記
曾我物語
義經記
（謠曲）
（狂言）
（連歌）
（俳諧）
（御伽草紙）

元寇（一九四一）
足利尊氏の反（一九九五）
論語を刻す（二〇二四）
南北兩朝合一（二〇五二）
應仁の亂（二二七）

近古文學一覽（備考 一、紀元欄の年數は其の天皇即位の年 二、作品の上に―あるものは上欄の人の作品）

近

時代	紀元	天皇	人名	作品	參考
	一八四五（文治元）	後鳥羽	慈圓法師		頼源朝征夷大將軍に任ぜらる（一八五二）
			藤原良經		
			式子內親王		
	一八五九（正治元）	土御門	宮內卿	水鏡	
			鴨長明	方丈記	藤原俊成卒す（一八六四）
			藤原家隆		
			藤原定家	新古今集	
	一八七〇（建暦元）	順德	藤原秀能		
	一八八一（承久三）	後堀河	源實朝	金槐集	法然入寂（一八七二）
				保元物語	承久の亂（一八八一）
				平治物語	親鸞淨土眞宗を開く（一八八四）
				平家物語	
				源平盛衰記	
	一九〇六（寛元四）	後深草		東關紀行	
				十訓抄	日蓮法華宗を唱ふ（一九二三）
	一九三四（文永一）	後宇多		古今著聞集	
	一九六八（延慶元）	花園		宇治拾遺物語	
	一九七八（文保二）	後醍醐	阿佛尼	十六夜日記	元寇（一九四一）
	一九九九（延元四）	後村上		玉葉集	
			吉田兼好	增鏡	足利尊氏の反（一九九五）
			北畠親房	神皇正統記	論語を刻す（二〇二四）
	二〇二八（正平三）	長慶		風雅集	
		後宗良親王	頓阿	新葉集	

（中等新國文卷八附錄）

近古文學一覽（備考 一、紀元欄の年數は其の天皇即位の年 二、作品の上に―あるものは上欄の人の作品）

時代	紀元	天皇	人名	作品	參考
近	一八四五（文治元）	後鳥羽	慈圓法師		
			藤原良經		
			式子內親王		
			宮內卿	水鏡	
	一八五九（正治元）	土御門	鴨長明	方丈記	藤原俊成卒す（一八六四）
			藤原家隆		
			藤原定家	新古今集	
	一八七〇（建暦元）	順德	藤原秀能		
	一八八一（承久三）	後堀河	源實朝	金槐集	法然入寂（一八七二）
				保元物語	承久の亂（一八八一）
				平治物語	親鸞淨土眞宗を開く（一八八四）
				平家物語	頼源朝征夷大將軍に任ぜらる（一八五二）
				源平盛衰記	
				東關紀行	
	一九〇六（寛元四）	後深草		十訓抄	日蓮法華宗を唱ふ（一九二三）
				古今著聞集	
				宇治拾遺物語	
	一九三四（文永一）	後宇多	阿佛尼	十六夜日記	元寇（一九四一）
	一九六八（延慶元）	花園		玉葉集	
	一九七八（文保二）	後醍醐		增鏡	足利尊氏の反（一九五五）
	一九九九（延元四）	後村上	吉田兼好	徒然草	論語を刻す（二〇二四）
			北畠親房	神皇正統記	
古	二〇二八（正平三三）	長慶	頓阿	風雅集	
			宗良親王	新葉集	
	二〇四二（永德二）	後小松		太平記	南北兩朝合一（二〇五二）
				曾我物語	
				義經記	
	二〇八八（正長元）	後花園	一條兼良	（謠曲）	
			太田道灌	（狂言）	
		宗祇		（連歌）	
	二一二四（寛正五）	後土御門	山崎宗鑑	（俳諧）	應仁の亂（二一二七）
				（御伽草紙）	

大正十五年九月二十二日印刷
大正十五年九月二十五日發行
昭和元年十二月廿九日訂正印刷
昭和二年一月一日訂正發行

中等新國文

定價

一卷	二卷	三卷	四卷	五卷	六卷	七卷	八卷	九卷	十卷
金參拾九錢	金參拾九錢	金四拾壹錢	金參拾九錢	金參拾九錢	金四拾壹錢	金四拾錢	金參拾九錢	金四拾壹錢	金四拾壹錢

昭和二年度臨時定價

一卷	二卷	三卷	四卷	五卷	六卷	七卷	八卷	九卷	十卷
金六拾六錢	金六拾六錢	金七拾錢	金六拾六錢	金六拾六錢	金七拾錢	金六拾八錢	金六拾六錢	金七拾錢	金七拾錢

著者　廣島高等師範學校附屬中學校
國語漢文研究會
東京市日本橋區鐵砲町三番地

發行兼印刷者　合資會社六盟館
右代表者　杉本敏治

發行所　東京市日本橋區鐵砲町三番地　合資會社六盟館
電話特長浪花四六五一番　振替口座東京一二五五〇番

當館發行各教科書は常に充分なる製本準備仕り居り候に付萬一各地販賣所に賣切等のため教授上御差支を來し居り候節は直接當館へ御註文被下候はゞ直ちに御送本可仕候

（東京市芝區愛宕下町四丁目　中村印刷所印刷）

文庫
27
436
広島大学図書
2000026436